

大学礼拝

説教集

第 12 号

2008

東北学院大学

目次

巻頭言	宗教部長	佐々木哲夫	4
私学における宗教教育の意義について	理事 長	赤澤昭三	6
光あれ	学院長(大学長)	星宮望	10
救い主のID	東北学院理事	望月修	16
その名はインマヌエル	宗教部長	佐々木哲夫	21
見ないのに信じる人の幸い	大学宗教主任	永井義之	25
人間をとる漁師	大学宗教主任	野村信	30
無力の底で	大学宗教主任	佐々木勝彦	35
不可能の可能性	大学宗教主任	西谷幸介	41
悲しみに満ちた希望	大学宗教主任	北博	45

神の前に豊かになる生き方とは

大学宗教主任

出村 みや子 …………… 51

働くということ

大学宗教主任

村上 みか …………… 57

人生の迷いの解決

キリスト教学科長

原口 尚彰 …………… 62

非理性的・非合理的囚われからの救い

文学部教授

平河内 健治 …………… 67

建学の精神と校歌

文学部教授

志子田 光雄 …………… 73

命を救うことか、滅ぼすことか

経済学部准教授

松村 尚彦 …………… 78

ベトザタの池

工学部准教授

長島 慎二 …………… 84

ことばの不自由な人をもとばを用いて癒す

教養学部教授

渡部 敏 …………… 88

テゼ共同体を訪ねて

キリスト教学科

佐藤 司郎 …………… 92

ENGLISH CHAPEL SERVICE

宣教師・文学部教授

D・N・マーチー …………… 99

編集後記

大学宗教主任

北 博 …………… 100

巻頭言

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

人の印象は、大部分、初めて会う数秒から数分の間に、すなわち第一印象によって形成されると言われています。その場合、特に視覚經由の情報は重要です。顔の表情、目や体の動き、髪型・服装・爪・足元の身だしなみなど、会話という聴覚經由の情報を提供する以前に、かなりの量の情報が発信されているからです。人は、外観によって人を判断しがちなのです。それは、現在だけのことでなく昔からのことでした。

時代を遡ること約三千年、イスラエルの王を選ぶときのことです。預言者サムエルは、神から「エッサイの息子の中から王を選ぶ」との託宣を受けました。そこで、早速、エッサイの家に行ってみました。エッサイには八人の息子がいます。その中の一人エリアブを見たとき、サムエルは、これこそが神の選んだ王であると判断しました。しかし、その時、神は「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心に

よって見る」(サムエル記上一六章七節)と語ったのです。人は外観を見ます。しかし、神は心によって見るといふのです。

さて、「心によって見る」のですから、相手のことだけでなく、見る者自身の心が重要です。すなわち、重要なことは、神がどのような価値判断をもって人を見るのか、もしくは、外観ではなくどのような心に価値を見出すのかです。神の価値基準をわきまえておくことは、見られる者にとって重要なことです。示唆を与えてくれる聖書箇所があります。新約聖書「∴これに對して、靈の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」(ガラテヤの信徒への手紙五章二二～二三節)。靈の結ぶ実は、心からあふれ出て、必ずや、人の身だしなみや会話という外観に現われてくることでしょう。この説教集が、東北学院大学の心を映し出すものとして用いられるよう願っています。

私学における宗教教育の意義について

理事長 赤澤 昭三

箴言、第一章三三節

³³主を畏れることは論しと知恵。

めいよ さきだ
名譽に先立つのは謙遜。

大方の学生諸君はお気付きのことと思いますが、本学の土樋キャンパスにある中央図書館入り口の壁には「エホバを畏るるは知識の本なり」という聖句が掲げられています。これは旧約聖書の箴言第一章七節から引用されたものです。皆さんがお持ちの新共同訳の直前の訳では「主を恐れる」となっていました。しかし、真つ当な宗教的用語としては昔の文語体の「畏るる」や新共同訳の「畏れる」の方がより適当ではないかと思われまます。因に二つの訳語の意味をいくつかの国語辞典で調べてみますと、「恐れる」という動詞は、「こわがる」とか「怖じける」というような何らかの恐怖感を顕わす場合に用いられるのに対して、「畏れる」とは通例「かしこまる」というような畏敬の念を込めて用いられる場合が主であることが分かります。私たちは経験上、人知を超えた不可解な事象に遭遇すると驚愕や脅威を感じ、「恐れ」の気持ちを持つことがよくあります。しかし、

同時にいつもそれに対して崇敬の念を抱いて「かしこまる」というようなことはまずもってないでしょう。何故かといいますと、私たちがある事を特に「畏れる」という場合には、客体に対する人格的とでもいうべき関係が主体の意識の中にあるからです。換言しますと、そこには人びとが自分を超えた絶対者に対して抱く敬虔な思いが含意されているということです。このようなことは人びとが自然の事物などに抱く意識や感情とは異質のものであると考えられます。英語で表わすならば、*fear*と*reverence*との違いということになるかもしれません。

ところで、国公立の学校では禁止されていますけれども私立学校では公に認められている重要な事の一つに宗教教育があります。日本国憲法第二十条三項や改正教育基本法第一五条二項の規定にそのことが示されていると一般的に理解されています。このことにより私学は単に教養として諸々の宗教に関する知識を授けるだけでなく、特定の宗教教育とかその他の宗教活動をすることも認められているのです。すなわち、人間（人格）教育のため特定の宗教を基礎とすることができるといふことです。

その場合の宗教教育が、国公立の学校でも教えられている道徳教育と等質のものでないことは申すまでもありません。なぜなら道徳教育の対象である道徳とは、人間相互間や人間の社会に対する在り方についての規範を示すものですが、宗教は人間を超えた超越的な絶対者（聖なる存在）と人間との関係を根本の問題とするからです。したがって宗教教育の本来の使命は、そのような絶対者

に対する畏敬や崇敬の念を涵養することにあると申してもよいでしょう。とは言いましても道德と宗教とは全く無関係であるとするわけではありません。普遍的な道德的規範（道德律）の多くは宗教を根源とし、そこから形成されてきたからです。道德は優れた宗教の基礎があつてこそ權威あるものとして社会に受け入れられてきたと言つて間違いないと思います。しかし、道德教育を以てすべて宗教教育に代えることはできません。ここに宗教教育を認められている私学独自の存在意識があるのです。

東北学院の建学の精神を支える柱の一つは「エホバを畏るるは知識の本なり」という冒頭に記した聖書の言葉です。したがつて、本学院の宗教教育において畏敬される絶対者とはこのエホバに主のことにほかなりません。それは天地万物の創造主であり、しかもイエス・キリストという人間の姿をとつて私たちの世界に臨まれた人格神です。このような絶対者に対する私たちの立場は単に「恐れる」だけであつてはならないしその必要もないのです。本学院の宗教教育を支える根底には私たちと生きた神との人格的な関係があるからです。このような関係においてこそ人間の自己中心の価値観を超えた聖なる知恵（義と愛の精神）が与えられるということです。また、そこから創造者の人知を超えた權威に対する敬虔な心と感謝の念も育成されるものと信じられております。「敬神愛人」という四文字が建学の精神を表わすとされてきた根柢もここに求められるのです。

そのため、本学院では知育、徳育、体育の他に青少年の靈性を培う靈育とでもいうべき心の教育

を特に大切にしてきました。その中心の場が毎朝礼拝堂で共に守られている学校礼拝であります。この霊育によって道徳よりもさらに深く根源的などころで心の問題が受け止められると共に、正しい霊性の向上が期待されております。現今、我が国において一部の人の間に高まっている *spiritual* な問題への関心が不健全な *spiritual junkie* というような不幸な結末に至らないようにするためにも真の霊育の使命は極めて大きいと考えている次第です。

「光あれ」

学院長（大学長） 星 宮 望

創世記、第一章一〜五節

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

創世記、第二章四節

4 これが天地創造の由来である。

我々にとって「光」とは、種々の意味において「明るい」、「今後の進展を期待する」、・・・などの肯定的な意味を持っていると解釈するのが一般的でしょう。「我々の世界に光がなかったらどうなるか？」と問うてみれば、すぐに答えははっきりします。光がなければ何も出来なくなるのです。このように我々にとって「光」は重要です。その光を最初にこの世に創出したのが「神」で

あったというのが、この創世記の第一章一―五節の記述です。

旧約聖書の時代においては、現在の科学的な情報が全くなかっただけでなく、そのような科学的な態度そのものが許されなかったと考えられます。このような事情を考慮して、旧約聖書の記述を読み解く必要があると思います。そのように致したとしても、我々の世界に「光」がもたらされた意義は大きいと思います。そこで、我々の世界における「光」の意味を少し、考えて見ましょう。

だれしも、我々の日常生活において、光が重要であることは、わかっています。しかし、人によってはその理解の程度にかなり大きな相違があるのではないのでしょうか？

誰でも知っていることとしては、ものを見るときに光が必要なこと、地球の環境（とくに気温）を保つのに太陽の光が必要なこと、植物が生長するために必要なこと・・・などがあげられます。植物の成長に関する「光合成」や、プランクトンの成長を考えれば、光の存在が全ての生き物の生存の基本といっても良いでしょう。このように、「光」は、我々全ての生き物の生命現象に関わっているといえます。

ここでは、光の多くの種類の役割、機能の内でも、現代生活に深く関連していることを中心に少し考えて見ましょう。

最近のニュース報道の中で、私が興味を持ったことをまず、はじめに紹介しましょう。ご存知と思いますが、光は電磁波の一種です。その波長の大小によって、中波、短波、マイクロ波、ミリ波、

赤外線、可視光線、紫外線、X線・・・などと称されますがすべて電磁波であり、光はその一種です。そして、皆さんご存知のように、可視光は、プリズムにあてると赤、橙、黄、緑、青、藍、紫というように分かれますので、異なった光が混じったものであることが分かります。7色の虹はこのことを表した自然現象としてよく知られています。このことは、波長によって我々人間にとっ て見え方が違うことを意味します。それは、網膜にある視細胞の光に対する応答性、言い換えれば光センサの有する波長感度特性によりです。この光センサに含まれる視物質は動物によって異なっていますし、植物にも少し備わっています。最近の研究によれば、ある種の植物において、たとえば、トマトの成長に適した光の波長についての研究が行われ、ハウス栽培において照射する光の種類を選択して収穫量を上げる試みが行われているようです。具体的な例としては、秋田市にある「あきた企業活性化センター」において「発光ダイオードなどによる植物生産システム研究会」が企業などの協力も得て、日照時間の少ない冬の時期においても安定して出荷できる体制の整備を進めていることが新聞に報道されておりました。発光ダイオードは蛍光灯などに比べても、発熱が少なく消費電力も少ないために狭い場所で効率的に生産できるなどの特徴があるようです（日本経済新聞、平成18年2月）。レタスの成長には、赤色発光ダイオードによる照射が有効との報告があります。

また、漁業においても、光の波長の有効利用が試みられています。近海のイカ漁においては、夜

の暗黒の中にコウコウと照らす白熱電球に呼び寄せられたイカを釣り上げることが伝統的に行われてきましたが、昨今の原油価格高騰のあおりで、大電力を消耗する白熱灯を使用することが難しくなってきました。このような時代背景で、イカの目の光に対する応答の波長依存性を調べた研究の結果によりますと、イカの目は青色の光に特別よく応答することがわかりました。視感度が最大なる波長が470〜490nmとわかっています。この研究結果をもとに、イカ釣り船の夜の照明設備を「青色発光ダイオード（これは発光波長が450〜500nmです）」を用いた照明設備に変更して試し釣りをしたところ、極めて有効であることがわかったばかりでなく、使用電力を1/30にすることが出来て、原油価格が上昇している時期の漁業関係者を喜ばせたと伝えられています。これは、NHKの総合TVで平成17年12月（7日）に放映されましたのでご覧になったかたもいるでしょう。その後、平成19年になってから、青色発光ダイオードの光に、一部、赤色発光ダイオードの光を加えたほうがさらに効率が良くなるとの報告がありました。

これらの話題とは少し異なりますが、21世紀の社会において、情報通信の役割は大変大きなものです。1989年のベルリンの壁とともに、旧ソビエト連邦などが崩壊したことの大きな背景にこの情報通信革命が上げられています。いかに物理的な壁を堅固にしても、西側の情報が電波を介して東側に伝えられ、このことを誰も止められなかったといわれます。それから約20年たちましたが、現在では、その後の急速な情報通信システムの発展があります。仙台地区においても地上デジタル

TVが運用を開始いたしましたし、かつては考えられないような世界規模でのメールの利用が普及しています。これらに使われている最先端電子技術である「光通信」技術がこの仙台の地で発明されたことを認識しておられるでしょうか？東二番丁の国道4号線（五橋中学校脇）に「光通信発祥の地」という道路標識があることをご存知の方もおられるでしょう。これは、情報通信に使われている「光発生システム（発光ダイオード、半導体レーザ）」、「長距離光伝送ケーブル（屈折率分布型光ファイバー）」、「高性能光検出器（アバランシェホトダイオード）」の光通信の3要素のすべてが、東北大学電気通信研究所の教授であった西澤潤一先生によって開発・発明されました。西澤先生は、たまたま、私の修士論文、博士論文の審査委員をして下さった恩師でもありますので、ここで紹介させていただきます。このように、仙台の地は、本学の元工学部長の永井健三先生（東北大学名誉教授）による磁気録音方式の発明や、世界的な発明である八木・宇田アンテナ・など、世界に誇る発明のメッカであることを誇りにしたいと思います。そして、現在でもそれらに関連した研究が本学の工学部でも行われていることを付け加えたいと思います。

ところで、「光」について我々東北学院に連なるものとして、この創世記以外で心に浮かぶものをあげれば、言うまでもなく、新約聖書のマタイによる福音書第五章一三―一六節の「地の塩、世の光」でしょう。創造主なる神がこの世の生きとし生けるものに対して「光」を与えられたことの意味を考えると、その意味の大きさに圧倒されます。この世の全てを支配される神であって初

めて「光あれ」と言うことができたのでありましょう。我々、被創造物である人間に出来ることは、この与えられている「光の世界」における恵みをより有効にするための努力でしょう。その意味で、新しい工学的な研究・開発は重要でありますし、それらを間違いない形で社会に使用・利用して行くための方式に関して提言・貢献してゆくための人文社会系の研究・発言が重要であると思います。そのような意味で、新しい21世紀における社会生活における「光技術」を大学人としてしっかり見つけてゆきたいと思えます。

「救い主のID」

東北学院理事 望月修

マタイによる福音書、第一二章三八〜四二節

38 すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。39 イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない。40 つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になることにな

る。41 ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。42 また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

こんにち、交通わけでも通信手段の発達によって、情報を広く速く大量に取得することが可能となりました。どこでも居ながらにして、世界中の情報を実に様々な角度から得ることができるよう

になったのです。しかし、それなら、この時代におけるコミュニケーションは、以前にもましてスムーズになったかと言えば、必ずしも旨く行っていないのが実状ではないかと思えます。

先日、インターネットで切符の予約しました。当日になって窓口に出向いたのですが、本人である私が予約内容を口頭で述べているのに、窓口の担当者はそれよりも予約IDを示せと言うのです。「アイデンタフィケーション（＝ID）を提示してください！」そう言われて、慌て鞆の中のプリントアウトした紙片を取り出しました。

最近、いろいろな機会や場面で、IDカードやIDナンバーを提示することが求められるようになりました。まさしく、情報化社会になくてならぬものとなっています。本人がそこにいるのに、同一人物であることの確認をそういうものなのです。まあ、そんなものかと思うのですが、もはや本人よりも数字やバーコードの方を信用しているみたいで、多少奇妙な気持ちになりました。

先ほど読みました、「マタイによる福音書」(二二・三八―四二)に、「先生、しるしを見せてください」と律法学者とファリサイ派の人々が主イエスに言った、と書いてありました。この「しるしを見せてください」というのは、簡単に言えば、お前が神であることの証拠を示せということです。それは言うなれば、イエスよ、あなたが神の子であるなら、そのIDを提示せよ、ということでありましょう。そうしたら、あなたが神の子であることを信じよう、ということでもあります。

自分たちに、納得できる証拠を示せ、ということです。コミュニケーションが、そういうものを要求し、それが満たされなければ成立しない、ということから言えば、コンピューターが発達した今も、そういうものがなかった昔も、実はそんなに変わらないとも言えます。

ここに登場する「律法学者とファリサイ派の人々」は、目の前にいる、神の子、救い主イエスキリストを信用できないでいます。それよりもIDを示せ、ということです。そういう彼らに対して主イエスはお答えになりました。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」(三九一四〇)。

コンピューターによって成り立つ社会が、邪悪とは言えないでしょう。しかし、本人確認ができなければ対応しないというのは、相互が不信であることを前提にしている、と言って差し支えないでしょう。技術科学が発展し文明が進んでも、それを用いるのは生身の人間です。その人間が限りなく信用できるというのは幻想でしかありません。その点で、むしろガードしておくことが賢明でありましょう。しかし、私たちが見落とせないのは、この場面の「律法学者とファリサイ派の人々」は、最初から「主イエス」とのコミュニケーションを拒否していることです。たとえ、相手についての詳細な情報を手入しても、主イエス本人にアクセスする気など毛頭なかったのです。

主イエスが、ここで指摘しておられる「預言者ヨナのしるし」というのは、旧約聖書に登場する

預言者ヨナが、旅の途上で船が遭難し海に落とされた時のことです。彼は大魚に飲まれ、陸地に吐き出されました。このエピソードは、神がお遣わしになる救い主は、私たちを罪から解放するため、十字架について死ぬけれども三日目に復活することを証しています。つまり、この救い主のIDは「十字架と復活」にあるということです。ところが、この「律法学者とファリサイ派の人々」は、このIDを受け入れることができませんでした。それは、もっと自分たちの気に入る別のIDを示せ、と言っているようなものでした。

この点で、私たちも同じではないかと思えます。その者が救い主であること、あるいは神であることの証拠を、例えば、病気を治す、日照に雨を降らせる、家内を安全に保つ、交通安全、良縁、学業向上、商売繁盛・・・、そのように御利益を与えることに見いだそうとしています。しかし、主イエス・キリストは、そのように仰せになりませんでした。「わたしは、君たちを救うために来た。そのために、わたしは、既にヨナのエピソードが証しているように、十字架について死に、そして復活するのだ！ つまり、君たち人間を罪から解放するために、自分の命を犠牲にし、君たちが本当の命に生きることができるよう復活させられる、そのことこそ、わたしが神であることの証拠だ！」ということにあります。

信仰とは、この御子自身によるIDを認めることです。それを承認することです。そうでなければ

ば、私たちは、いつまでたっても神が分からないでしょう。神の支配や恵みというものも分からないでしょう。そして、人生の意味や目的、さらには永遠について、したがって、本当の自分も、本当に大切なものも見いだすことができないでしょう。

遠い昔、ここに挙げられている、ニネベの人々は、ヨナの説教に、このIDを認めました。また、南の国、その名をシェバと伝えられている国の女王は、このIDを求めて遠く旅をして来ました。それに対して、私たちは、聖書から、直接、また、このような礼拝によって、まことの救いと命を与える、神の子イエス・キリストのIDを示していただいている、そう言ってよいと思います。私たちは、このIDを承認して、ただ、信仰というパスワードを入力するだけでよいのです。そうすれば、神との真実な、そして幸いなコミュニケーションが成立し、それによって、まことの救いと命にあずかることができ、神の御前にある本当の自分自身を見いだすことができます。

「その名はインマヌエル」

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

マタイによる福音書一章二二～二三節

22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するた
めであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

歴史を遡ること約二千年、エルサレムの南方八キロメートルに位置する小さな町ベツレヘムに、イエス・キリストは生まれました。マタイ福音書は、その出来事を、旧約聖書の預言者イザヤの言葉「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」を引用して記録しています。本日開きました聖書個所に記されているとおりです。

インマヌエルという表現は、預言者イザヤのヘブライ語をそのまま記録した言葉です。前半部のインマヌは「我々と共に」、後半部のエルは「神」という意味ですから、インマヌエルは「神、我々

と共におられる」という意味になります。すなわち、イエス・キリストの誕生を「神、我々と共におられる」出来事であると解説しているのです。この言葉は、実に意味深い表現です。ご一緒に、イエス・キリストの誕生がインマヌエルの出来事であったことについて考えたいと思います。

イザヤのインマヌエル

さて、イザヤという人物は、紀元前八世紀のユダ王国で活動した預言者です。当時の世界では、と言っても今日の世界とあまり変わりがないかも知れませんが、神は、神話によって知られる存在でした。神話の神は、天高く遠くに存在しています。例えば、バビロニア神話に登場する神エンリルは、地上にうごめく人間たちを天から見下ろして、他の神々に語ります。「人間どもの騒ぎは耐え難いほどひどくなつた。彼らの騒々しさのために眠ることも出来ぬ。」これが発端となって、神々は、やがて、大洪水を引き起こし、人間を根絶やしにしようとしてきました。これが、古代オリエント世界の常識的な神の姿でした。天に存在する遠い神です。

しかし、オリエント世界の小国ユダの預言者イザヤは、そのような当時の常識を打ち破るかのよう「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」と預言したのです。インマヌエル、すなわち、「神は我々と共におられる」と、私たちの近くに存在する神を預言したのです。だが、イザヤには、神から預かったこのインマヌエルという預言が、具体的に誰に

おいて実現するかを見通すことはできませんでした。預言の成就が、霞のかかったような時空の彼方に存在していたからです。

マタイのインマヌエル

さて、預言の成就をはっきりと目撃することができたのは、イザヤから八世紀後の人たちでした。新約聖書の人々です。マタイは、イエス・キリストの誕生を「預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と記し、イザヤ預言の成就を宣言しています。

しかし、マタイは、ベツレヘムの家畜小屋に寝ている男の子を実際に見てはいません。誕生に立ち会ったのは、貧しい羊飼いたちであり、東方から訪ねてきた博士たちでした。マタイがイエスと出会うのは、それから三十年経った時のことです。しかし、マタイは、はっきりと、イエスの誕生をインマヌエルの出来事であると認識したのです。それは、誕生の時ではなく、イエス・キリストの十字架と復活の時間においてでした。聖書に次のような言葉が記されています。「(イエス・キリストは) 十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。」(一ペテロ二章二四節)。罪を糾弾し洪水を起こす神ではなく、罪のゆるしを実現した十字架の出来事にインマヌエル預言の成就を確信したのである。

私たちのインマヌエル

さて、マタイの時代からさらに二千年の時が経過しました。今日、私たちのそばに地上のイエス・キリストはいません。復活の後、四十日経って、イエス・キリストは天へと昇ったのです。土樋礼拝堂の正面のステンドグラスには、天に昇る直前のイエス・キリストの姿が描かれています。しかし、これが最後の場面ではありませんでした。この時、イエス・キリストは、聖霊なる神が到来するという新しい時代の幕開けをも告げていたからです。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使徒言行録一章八節)。やがて、聖霊なる神が降り、新しい時代、新しいインマヌエルの時代が始まりました。教会時代です。その意味において、インマヌエル預言の成就是、今日まで続いています。「神、我々と共におられる」という意味を込めて、共に、メリークリスマスの挨拶を交わしたいと思います。

見ないのに信じる人の幸い

大学宗教主任 永井義之

ヨハネによる福音書、第二十章二四～二九節

24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うとき、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、わたしは決して信じていない。」26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみない鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

英語の辞書に「ダウティング トーマス」という言葉が見出し語として載っています。言うまでもなく今読みました聖書に基づく言葉です。疑い深いトマス、疑うトマスという言葉ですが、トマ

スがそう言われるようになった事情が聖書に述べられています。聖書によれば、十字架の死の後、イエスは復活して弟子たちの所に現れました。しかしそのとき、トマスは他の弟子たちと一緒にいなかったのです。他の弟子たちと共に「わたしたちは主を見た」とトマスは言えなかったのです。なんと残念なことかと悔やまれる思いをしたに違いないトマスが言い放ったのは「イエスの体の傷跡に指、手を入れてみなければ決してわたしは信じない」という言葉でした。場面が変わって、今度はトマスも他の弟子たちと一緒にいたとき、イエスは弟子たちの真ん中に立ちトマスに語りかける、「あなたの指、手を傷跡に入れなさい」さらに「信じない者ではなく信じる者となりなさい」と。トマスはひれ伏し「わたしの主、わたしの神よ」と言うと、イエスはたたみかける様に「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである」と語られた。

この物語は、疑うことをいさめる話なのでしょうか。あの疑い深いトマスのようになってはいけないよと教える物語なのでしょう。どうもそのようには思われなものです。もし疑ってはならないというならば、この話は聖書という書物にとって、とても都合が悪いことを書き記した物になってしまします。なぜなら、復活という事実は初期キリスト教にとって重大なメッセージでした。しかもマタイ福音書によれば、当時の為政者と宗教指導者たちはイエスの弟子たちが遺体を盗んで「イエスは復活した」と言いふらすかもしれないと警戒し、墓の警護を厳重に命じていたのです。そのような中で復活を否定する最初の発言をしたのがほかならぬイエスの側近中の側近であった弟

子トマスであったというのでは、キリスト教のメッセージは台無しです。このことがキリスト教にとって不都合であり、あってはならないことだとしたら、聖書の長い伝承過程でトマスのエピソードそのものが抹殺されて聖書には存在しなくなっただとしてもおかしくはありません。しかし事実はそのではありませんでした。聖書は復活を疑ったトマスがいたことを包み隠さず伝承してきました。部外者が否定するならまだしも、イエスのそば近くにいた弟子の一人トマスがまず疑ったという、まことに不都合なる事実を赤裸々に語っています。

それでは、「疑ってはいけない」というのではないとしたらこの物語は何なのでしょう。この物語に頻繁に出てくる言葉は「見る」と「信じる」の二語です。見ることと信じることには四つの類型が考えられます。①見たから信じる②見たのに信じない③見ないから信じない④見ないのに信じるの四類型です。①の見たから信じるというのは、「わたしたちは主を見た」と言った他の弟子たちの立場です。②の見たのに信じないは、当時の弟子たちを除く大多数の人々の立場でした。③の見ないから信じないというのも当時の大多数の人々の立場です。④の見ないのに信じるというのは、主イエスがトマスに会ったとき勧めの言葉として語ったものです。そして、主イエスがトマスに語ったのは④の見ないのに信じることの幸いでした。

見る、見ないはわたしたちの感覚によって物事を捉える認識方法です。しかし哲学者プラトンが勧めるように感覚ではなく理性で捉えるべき世界があるのです。なぜなら感覚は往々にして騙され

るからです。感覚的認識は気分には左右され、感情に支配されもする不確かなものです。本日の聖書を読むと、ひれ伏したトマスに対して主イエスは「わたしを見たから信じたのか」と問いかけます。つまり、「あなたが信じるというのは、他の弟子たちと同じように『見た』からなのか」という問いです。もしトマスもまたイエスを目の前にして見たゆえに信じたのであれば、他の弟子たちが『わたしは主を見た』と言って、見たことの特権的立場を誇示するのと変わりありません。当初それに反発し、「わたしは信じない」と他の弟子たちとは一線を画したはずのトマスですが、主イエスを見たたんひれ伏して「信じる」と表明したとき、彼の「信じない」はどこかに雲散霧消してしまったのです。主イエスは「見ないのに信じる人は幸いである」と語られました。これは、トマスの「疑うこと」の不徹底をつく言葉です。「見る」ことに根拠を置いた信仰はいっしょか「見ない」「見えない」事実につき当たらるとき不確実なものとなって揺らいでしまいます。しかし見る、見ないを超えて信じる可能性がある。トマスはせっかく「見ないのに信じる」可能性の入口にいたのに、それを放棄してしまったので他の弟子たちと同じ地平に立ってしまったことになります。

主イエスは「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われました。見たにせよ、見ないにせよどちらも大きな差があるものではありません。そこに根拠を置いてしまうことのほうが大問題です。それは主イエスが他の弟子たちをどう見ておられたかを示す言葉からうかがい知ることができます。疑うことさえ疑って徹底するとき、あらたに開けてくる信仰の世界への招きの言葉、

それが「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」でありました。この言葉は疑うことを排除したものではありません。信じる者には一点の曇りもなく疑うことなどあってはならないというのは聖書の信仰の立場ではありません。信仰は疑うことさえ許容しています。トマスはダウティング・トマス、いつも疑っているトマスでよいのです。そのトマスに主イエスは「信じる者になりなさい」と新しい地平を指し示されるのです。

祈りましょう。

憐れみ深い父よ。疑いの闇の中で明らかに見ることをのみ求めている私たちを省み、わたしたちに必要な一歩前進できるあなたの言葉を与えてください。そのあなたから与えられる言葉によって勇気を得、生かされる者となることができますように。

主イエスの御名によって祈ります。アーメン

(二〇〇七・一〇・一 泉キャンパス礼拝)

「人間をとる漁師」

大学宗教主任 野村 信

マタイによる福音書、第四章一八節〜二二節

18 イエスは、ガリラヤ湖このほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟きょうだい、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網あみを打うっているのを御覧ごらんになった。彼らかれは漁師りょうしだった。

19 イエスは、「わたしについて来きなさい。人間にんげんをとる漁師りょうしにしよう」と言いわれた。20 二人はすぐに網あみを捨てて従したがった。

21 そこから進すすんで、別の二人の兄弟きょうだい、ゼバダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親ちちおやのゼバダイと一緒に、舟ふねの中で網あみの手入れていをしているのを御覧ごらんになると、彼らかれをお呼びよびになった。22 この二人もすぐに、舟ふねと父親ちちおやを残のこしてイエスに従したがった。

主イエス・キリストが、ガリラヤ湖のほとりを歩いていた時、ペトロとアンデレという二人の漁師が湖で網を引いて魚を獲っている様子をご覧になりました。そこで、二人に向かつて、「私についてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と言われました。二人はすぐに網を捨てて従いました。さらに進んで、ヤコブとヨハネが網の手入れをしているのを見て、また二人を招くと、二人は直ち

に主イエス・キリストに従いました。

こうして、いづれ集められる12人の弟子の最初の4人がキリストに招きに応じて、従ったのです。キリストはこの漁師たちに「人間をとる漁師にしよう」と言っています。魚を釣ることに關しては、プロとして、腕に自身のあつた漁師たちです。彼らに「人間をとる漁師にしてあげよう」と誘つたのでした。

「人間をとる漁師」といっても、實際、この弟子たちは、キリストの死後、多くの人々に教え、導き、癒しをするという働きをして人々に仕えたのです。つまり、人間をとる漁師にしようと言われても、たくさんの人々を従えてボスになったり、支配者になったのではなく、逆に多くの人々の世話をし、めんどうを見るといふ奉仕の仕事をして生涯を送つたのです。

この弟子たちは、もとの職業を捨てたわけではありませんでした。漁師であつた弟子たちは、時々、必要な時には、湖で魚をとりました。テントをつくる職人であつた弟子は、生活のためにテントを作ることもしています。大工もいれば、他の職業をもつた弟子たちもいました。しかし、この弟子たちは、キリストに従つた後、その生涯を、一方で本職を時々こなしながらも、多くの人々に、人はこの世界の飲み食いし、めとったり、とついたり、働いたりするという、いわゆる衣食住に關することだけで生きているのではなく、もっと大きな目的、あるいはこの世界を超えた何か永遠と關わる希望をもって生きるのであると示したのです。

そして、生きる希望を失っている人々や、体に不自由を覚えている人々や、罪や悪に陥っている人々に、何よりも、キリストが地上に來られたのは、新しい命と新しい希望を与えるためであると説き、人々を新たに立ち上がらせて、新しい人として生きることを実現していったのです。

キリストは、死んで復活されて、世界の救い主となりましたから、私たちの肉眼では見えませんが、私たちの中に今も來られて、私たちに「私に従いなさい。あなたを人間をとる漁師にしよう」と誘っておられるのです。

少なくとも、私たちのような、キリストについての語り手が、キリストの手となり足となって、あるいは口となって、人々に、キリストの言葉を語り継ぐ働きを担っています。

その時、私たちは、何が求められているのでしょうか。それは、私たちがまた、日々の生活をし、みな仕事につき、家庭をもって、普通に生きていきますが、ただそれだけで人生が終わるのではなくて、人間はこの世界に生きながらも、この世界を超えた希望、永遠に関わるような何か、かけがえないものを知って生きていくことが求められると教えられているのです。

東北学院で学ぶ学生の皆さんは、今、毎日講義を聞いていますが、それを理解し、自分の養いとし、定期試験もパスして、無事に卒業し、いずれ希望の会社に入って、ばりばりと活躍することが期待されていると言ってもいいでしょう。私たちの大学はそのような学生を育て、巣立っていくことを一つの大きな目標としています。

考えて見れば、それだけで十分かもしれません。「衣食住足りて良しとする」、と言われるように、謙虚に、与えられた毎日を感謝し、人々と幸せに暮らしていければ十分なのかもしれません。

しかし、私たちは、この時、キリストの招きを、あらたに聞くのです。「魚を釣るだけでなく、人間を釣ってください」と。もちろん、さっき申しましたように、人間たちを餌で吊り上げて、収穫を得るような仕方ではありません。

魚がたくさん釣ればこれで十分だと思っている漁師たちに、人は、魚を釣ってそれを食べ、売って商売をするというだけでなく、さらに本当に必要な、かけがえのないものが、人生の中であって、それに気づき、それを受け入れていく時、人間が人間として本来の意味を見出し、終わりに向かって衰えていくのではなく、さらに大きな目標に向かって前進していくのである、いわれているのです。だから年を取るのとは老人になるだけではなく、新しい大きな希望に向かって進んでいくことなのです。

「あなたにも、人間をとる漁師になってほしい」とキリストは今も私たちの中で、求められています。しかし、これは、大変な冒険かもしれません。無理な要求だ！と感じる人もいるかもしれませんが。あるいはまっぴらごめんだ、と思う人もいるかもしれません。

事実、弟子たちは、この時は、こんなに潔くキリストに従いましたが、実際は、この後、みなちりぢりばらばらに逃げていくのです。そんなに簡単に人に従えませんし、また人の言っている意味

が分かるではありません。

しかし、良き師の招きを受けた時から、もう人生は新しく始まっているのです。すべての人がこの招きに従うかはわかりませんが、今はまっぴらごめんだと思っても、ある時ふと、その招きがまさに私に向けられていて、その招きに答えようと腰を上げる人もいるかもしれません。いずれにせよ、私たちは、招かれています。まず、招きが私たちの中に、もたらされているのです。「あなたは、魚を取るだけでなく、人間をも釣ってください」と。「自分の生き方ばかりにこだわっているだけでなく、人を生かし、人のために生きてください」と。キリストは願っておられます。

キリストが今も、私たちの中に来られて、私たち一人ひとりを尋ねておられる声を是非、聞き分けていただきたいと願います。

「無力の底で」

大学宗教主任 佐々木 勝彦

詩編、第八章五節

5 人の子は何ものなのでしよう、あなたが顧みてくださるとは

詩人は「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの」と歌っています。

なぜかこの詩には太陽が出てきません。

詩人は、夜空を見上げているようです。しかしその具体的な場面となると、もうひとつはつきりしません。私たちの経験では、月と星が同時にくっきりと見えることは少ないからです。したがってこの詩は、一度ならず「繰り返し」夜空を見上げる中で生まれた可能性があります。

悲しかったのでしょうか。それとも悔しかったのでしょうか。

しかも、月も、星も、神の被造物であると歌っています。古代世界においてこれは驚くべきことです。古代の農耕民にとって、また遊牧民にとっても、月の満ち欠けと星の位置は生きるうえで欠くことのない知識であり、月も星も神々に等しい存在だったからです。

さらに詩人の眼は、神の創造された天から地へと、つまりこの地に立つ人の子へと移行して行きます。しかもこの詩人は、夜空を見上げながら、自分の「ちっぽけな存在」を思い起こし、感傷に浸っているわけではありません。大宇宙を前に、今日一日のストレスを解消しようとしているのでありません。

かつて聴いた「聖書の言葉」を思い起こしているのです。それは旧約聖書の創世記一章二六節以下に記された人間の創造に関する記事です。詩人はすでに小さいときにこれを学び、自らの生きる支えとしてきました。いま彼は、その親しんできた言葉を口ずさんでいます。

「神に僅かに劣るものとして人をつくり

なお栄光と威光を冠としてただかせ

御手によって造られたものをすべて治めるように

その足元に置かれました。

羊も牛も、野の獣も

空の鳥、海の魚、海路をわたるものも」。

これは、「人間とは何か」という問いに対する聖書の答えです。人間とはすべて、つまり王のよ

うな特別な人間のみならず誰もが、神にかたどって創造された被造物であり、「地を従わせ、すべての生き物を支配する」存在だということです。この地も、すべての生き物も、もちろん人間と同じく神の被造物であり、人間の所有物ではありません。したがってここで言う「従わせよ」「支配せよ」との命令は、神の被造物として「管理せよ」という意味です。人間は管理者であっても、決して所有者ではありません。人間はマネージャーであっても、オーナーではなく、マネージャーらしく生きることを期待されています。

管理者の仕事、それは、所有者の意図にふさわしく、託されたものを管理することです。それが管理者の責任です。人間は、この意味で創造者の意図にふさわしく世界を管理する責任を問われているのです。

それにしても詩人はどうしてこの聖書の言葉を口ずさんだのでしょうか。そもそもなぜ天を仰がねばならなかったのでしょうか。どんなつらいことがあったのでしょうか。

二節以下の言葉その理由を示唆しています。

「天に輝くあなたの威光をたたえます

幼子、乳飲み子の口によって

あなたは刃向かう者に向かつて砦を築き

報復する敵〔岩波訳・敵なる復讐者〕をたち滅ぼされます。】

詩人は明らかに「敵」に追いつめられ苦しんでいます。苦境に立たされて、天を仰いでいます。しかしこの敵が具体的に何を指しているのか、残念ながら分かりません。

もっと分からないのは「幼子、乳飲み子の口によって」という句です。この句をすぐ前の「天に輝くあなたの威光をたたえます」にかけて読むのか、それともすぐ後の「あなたは刃向かう者に向かつて砦を築き」にかけて読むのか。どちらの解釈も可能です。前者の場合には、「幼子、乳飲み子」が「たたえる」ことになります。後者の場合には、神は、「幼子、乳飲み子」のような最も弱い存在をもって救いの業をなすとげ、敵を征圧することになります。

特に後者の場合、救いの業は、「力」ではなく、「非力」あるいは「無力」を通して実現されることとなります。もちろん私たちは、この「無力」の発見に詩人の救済体験を重ねて読むことも可能です。

この箇所を関根氏はこう訳しています。

「あなたは嬰兒（みどりご）、乳飲み子の口に

力の基を置き、敵に備えたもう。

仇する者、敵する者を鎮めんがため」。

ここまで来ると、詩人が天を仰ぎ、月や星を見上げながら、創世記の言葉を思い起こしている様子が浮かび上がってきます。それは、「無力の底で働く創造者」の声を聴く体験であると同時に、自らの「存在価値」の発見の体験でもあります。

詩人の心には、幼いときから慣れ親しんだ聖句が、慰めと祝福に満ちた約束として響いています。そして詩編八編の最後では、冒頭のあの創造の讃歌が繰り返されています。

「主よ、わたしたちの主よ

あなたの御名は、いかに力強く

全地に満ちていることでしょう」と。

この創造の讃歌は、詩人の痛みと苦しみの体験が、そしてどうしようもない嘆きと呻きが、「わたしたち」によって宇宙的視点から共有され、共感されていることを示しています。

たしかに、私たちはかつての詩人のように、これほど素朴に「創造の讃歌」を歌えないかもしれ

ません。自然環境の破壊は歴然たる事実であり、月の資源をめぐる競争あるいは戦争さえも、予想されるからです。しかしこれも人間の「管理責任」の問題であることを思い起こすならば、どうでしょうか。被造物の「うめき」（ローマ八章）は、「無力の底に」働く神の力によってのみ克服されます。

「人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは」（詩編八・五）と告白する人間の誕生こそが、今、求められているのです。詩編第八編は、現代への問いかけであると同時に、その解決への道を指さしています。かつての詩人やキリスト者と同じように、私たちもこの詩編を繰り返し口ずさみながら、自らの道を歩んで行きたいと思えます。

祈りましょう。

イエス・キリストの父なる神様、私たちにもこの詩人のように「無力の底」でああなたのみ業にふれる機会が備えられていることを信じ、この現実へと踏み出す勇気をお与えください。

十字架と復活の主の御名を通して祈ります。アーメン

「不可能の可能性」

大学宗教主任 西谷幸介

マルコによる福音書、第一〇章四二〜四五節

42 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

聖書に示された主イエスの教えは、倫理の観点からしますと、生身の人間にとっては何とんど実行不可能な教えである、と言ってよいかもしれません。たとえば、山上の説教（マタイ福音書五〜七章）では、次のように言われています。すなわち、あなたがたも聞いているとおり、「殺すな」と命じられている。しかし、私は言う、兄弟に腹を立て、馬鹿者と言う者は、殺人者と同じように、裁きを受ける。「姦淫するな」と言われているが、みだらな思いで異性を見る者は、姦淫と同罪で

ある。「目には目を、歯には歯を」と言われているが、私は言う、右の頬を打つ者には左の頬を差し出さない。「敵をも愛し、自分を迫害する者のためにも祈れ」——といった具合です。ここには途方もなく高い倫理的要請が示されています。

ある神学者は、この教えは現実の人間社会には適用「不可能」である、と断言しました。しかし、また、ある神学者は、それに十分に共感しつつも、これを「不可能の可能性」と特徴づけました。どういう意味でしょうか。たしかに、この教えを実行することはほとんど不可能なのですが、しかし、万に一つは可能でもありうる、ということでしょう。

つまり、人はこのような主イエスの教えの崇高さ・実行困難さに直面して、冷笑主義的に振る舞ってはならない、少なくともそれに向かって精一杯のチャレンジを続けていかねばならない、ということなのです。たしかに、この教えはふつうの常識的な人間には愚かにさえ響くものであり無意味だ、と言えるかもしれません。しかし、そう言い切ってしまうと、では、それでいいのだろうか、という反問が残ります。人間は神のかたちに創造された存在として、理想へのひとかけらの憧憬も持ち合わせなくてもいいのだろうか、という煩悶が残るのです。

今朝お読みしましたマルコ福音書一〇章四二〜五節の主イエス自身の言葉も、いまご紹介しました山上の説教の教えと同様の「不可能性」を感じさせる言葉です。イエスはこう言われます。すなわち、この世の支配者たちは権力を振るっているが、しかし偉くなりたいと思う者は皆に仕える者、

すべての人の僕になるべきである。私（メシア）が、仕えられるためではなく仕えるために、多くの人の罪の贖いとして命を献げるために来たように、と。——これもまたあまりにも気高い教えであり、とくに為政者たちには、自分には「適用不可能」、と退けられてしまう教えでしょう。

しかし、最近読んでおりました、アメリカ人政治学者チャールズ・E・メリアムの『政治権力』という古い本に、この主イエスの教えを思い起こさせ、その意味を再認識させるような一節があるのに気がつきました。メリアムは、政治権力の「表」を支えるものに「ミランダ」と「クレデンダ」というものがある、と論じます。ミランダとは、記念日や記念碑、儀式や物語といった、政治権力に安定性を与える感性的な諸象徴のことです。クレデンダとは、信頼に足る要素という意味で、たとえば、その権力が神的権威に保障されたものだと思わせるもの、卓越した指導力、多数の人々からの同意と是認といった、道徳的な側面です。政治権力は、暴力や残忍さ、偽善や賄賂といった、それを「裏」から支えている薄汚い部分をもっていることも確かなのですが、しかし、メリアムによれば、権力者たちはすべて劣悪な権力欲に突き動かされているわけではなく、それ相当の自己犠牲・自己放棄によってその権力の正当性を得ているのであり、不十分ではあってもじっさいにそうした部分をもっているのです。それがかろうじて彼らの存在が是認されている理由なのです。「長」と名がつく人々にとってはことに心すべき指摘でしょう。

「権力に飢えた人間には理解できないことであるが、こうした自己放棄こそが真の権力に至る道

である。これまでにガンディー以上に大きな権力を握った人間は少ない。

このような政治哲学者の言葉に触れますと、主イエスの教えは私たちの現実の生活とかけ離れた理想であって、罪深いこの世の現状には関連をもちえないものだ、と、早急に決めつけてはならないことに気づかされます。一見理想主義的すぎると思われるその教えは私たちの現実の生活に適合性^{レリヴァンス}をもちうるのであり、むしろ、それによってこそ、いつでも汚泥の底に沈もうとする人間の現実を救われ、支えられるのです。

こうして、「愛敵」という究極の倫理にまで高まる主イエスの「不可能の可能性」としての愛^{アガペー}の教えは、私たちの日常生活の在り方に「問い」を提起し、然るべき「緊張」を与え、それが冷笑的な諦めや自己欺瞞に陥らないように、「上」に引っ張りあげる「力」として、私たちの前に現われます。そうした意味で、私たちはこの主の教えを敬い、重んじ続けていかねばならないと思います。

悲しみに満ちた希望

大学宗教学主任 北

博

ヨブ記、一三章一三節〜一九節

¹³ 黙だまってくれ、わたしに話はなさせてくれ。

どんなことがふりかかって来きてもよい。

¹⁴ たとえこの身みを自分じぶんの齒はにか

魂たましいを自分じぶんの手てに置おくことになってもよい。

¹⁵ そうだ、神かみはわたしを殺ころされるかもしれない。

だが、ただ待まってはいられない。

わたしの道を神かみの前まえに申もうし立たてよう。

¹⁶ このわたしをこそ

神かみは救すくってくださるべきではないか。

神かみを無視むしする者ものなら

御前みまえに出でるはずはないではないか。

¹⁷ よく聞きいてくれ、わたしの言葉ことばを。

わたしの言い分いぶんに耳みみを傾かたむけてくれ。

¹⁸見よ、わたしは訴うったえを述のべる。

わたしは知しっている、わたしが正ただしいのだ。

¹⁹わたしのためあいらそに争あってくれる者ものがあれば

もはや、わたしは黙だまって死しんでもよい。

旧約聖書には、神が歴史世界を支配し導いているという「神支配」の思想があります。この考えは、新約聖書において「神の国」という表現を用いて引き継がれ、新たに展開されておりまして、マルコによる福音書一章一五節では、イエスが「時は満ち、神の国は近づいた」と宣教の第一声を放った、と伝えられています。

ところが、ここである疑問が湧いてきます。本当に神は、この歴史世界を支配し導いているのでしょうか。現実の世界は様々な悪と矛盾に満ちています。こうしている今も世界では、至る所で戦争や内戦、暴力の応酬が続いており、罪もない子供達が巻き添えになって毎日殺されています。また、軍事政権や独裁政権が民主主義を弾圧し、不当に人々を逮捕、拷問し、殺害している国々もあります。飢餓に苦しんでいる人々が多くいるかと思えば、一方では飽食の結果ダイエットに苦しむ人々がいるという有様です。これが世界の現実です。これを見てなお「これが神のご意思」などと

言える人がいるとすれば、それはよほどおめでたい人だと言わざるを得ない。そうではありませんか。

こういった様々な矛盾や悪の存在、いわば現実の不条理は、今に始まったことではありません。旧約聖書の時代の人々も、こうした問題に直面しました。それに対して旧約聖書では、将来の変革への期待という形で、この問題への答えが提示されました。歴史を支配し導いている神は、将来のある時点で決定的に歴史に介入し、諸矛盾を一挙に逆転し、現在の悪い時代を全面的に変革するであろう、という期待です。このような考え方を終末論的な歴史観と呼びます。あるいは、人によっては「歴史観」という傍観者の印象を与える表現を避け、終末論的期待という言い方をすることもあります。もっとも、旧約聖書に「世の終わり」という観念はありません。旧約聖書における終末論的思考は、あくまで歴史内でのものです。この終末論的期待によって、旧約聖書の時代を生きた人々は、なお一層強く歴史が矛盾に満ちていること、つまりこれが本来あるべき姿ではないことを意識したに違いありません。そして将来の変革を待望すると同時に、それに向かって現在の様々な矛盾や悪と対決するという姿勢をも持ちました。このような意味での終末論は、とりわけ預言者達によって担われましたが、預言者だけではなく、旧約聖書全体の基調低音として、様々な時代やグループ、伝統に広く響き合っています。

しかし、このような将来への期待も、現実の矛盾があまりに甚だしく、耐え得ないと感じられる

時は、悲鳴に近いものとなります。詩編九〇・一三で詩人は、「主よ、いつまでなのか」という問いを発しています（新共同訳聖書で「いつまで捨てておかれるのですか」となっている箇所は、原文では単に「いつまで」と書いてあるだけです）。この「いつまで」という問いは、詩編（六・四、七九・五）や捕囚後の預言書（ゼカリヤ書一・一二）、黙示文学（ダニエル書八・一三）などに現われますが、このような切実な叫びはそのまま現代に生きる私達の声でもあります。また、ヨブ記六章一節に「私はなお待たなければならぬのか。そのためにどんな力があるというのか。」とあるように、それはしばしば挫折感や絶望感の表明に近いものとなります。

本日読みましたテキストも、ヨブの切実な訴えです。その中で、特にヨブ記一三章一五節に注目してみましよう。その前半部分の原文を直訳しますと、次のようになります。「見よ、彼（神）は私を殺すであろう。私は待たない。」ところが、多くの写本や古代訳に従ってこの部分の後段の否定辞のたった一文字を別の文字に変えることによって、「私は待たない」は「私は彼（神）を待つ」に変わってしまうのです。新共同訳は本文通り訳しています。前の口語訳聖書は、この部分が「私は絶望だ」となっています。これはおそらく英訳の RSV を真似た訳だと思えますが、本文の意識でしょう。それに対して新改訳聖書は、「見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、」と訳しております。関根正雄訳や中沢洽樹訳もそうですが、本文を「私は彼を待つ」に読み替えています。

一体、どちらが本当なのでしょう。学問的にはどちらとも言えません。文脈から判断しても、

どちらにも分がありそうです。ここから先は、もう人それぞれの感じ方次第だという気がします。私は若い頃（実は教会に行き始めた頃ですが）、この箇所について何時間も考えたことがあります。最後に私は、究極状況においてこの二つは殆ど違いがなくなるのではないかと感じました。

この問題に明快な答えを出した一人の男がいます。その男は一九六三年八月二八日、ワシントン・D・C・のリンカーン記念堂で、「私には夢がある（I have a dream）」という言葉を何度も叫んでいました。その中で彼は、イザヤ書四〇章を引用しながら、「（いつの日か）でこぼこの地は平らにされ、歪んだ道は真っ直ぐにされる」と断言しましたが、太いバリトンで表明された彼のこの確信は、多くの人々の共感を呼びました。それから約五年後の一九六八年四月三日、彼はメンフィスにいました。そして、その地での演説の最後を、申命記三四章でピスガの山から約束の地を見渡して死んだとされているモーセと自分を重ね合わせながら、「神は私を山の頂まで登らせてくれた。頂から約束の地が見えた。私自身は皆さんと一緒に約束の地に行けないかもしれない。でも知ってほしい。私達は一つの民として約束の地に行くのだということ」という謎めいた言葉で締めくくります。そしてその翌日、一発の銃弾が、この男、すなわちマーティン・ルーサー・キング牧師の人生を永遠に終結させました。

彼の「夢」は、実現したのでしょうか。あるいは彼は、単なる夢想家に過ぎなかったのでしょうか。私は、その答えは私達自身が自分達の生き方を通じて見つけるべきだと思っています。彼の言

う「夢」とは、「希望」という言葉に置き換えることが出来るものではないでしょうか。彼は、人類のあるべき姿を幻として見つめ続け、将来のその幻の実現への希望と共に生きたのです。

私は、フィリピンで地方の貧しい農家や都市の貧民街などを泊まり歩いたことがあります。そこで出会った貧しい人々は、皆生活に困っていましたが、意外なほど明るく、私に乏しい中から精一杯のもてなしをしようとしてくれました。生活の困難は、貧しい人々に日々押し寄せてきます。毎日が苦しみの連続で、明日の見えない生活です。このような絶望的な状況に生きる人々を支えているものは、何でしょうか。それは「希望」ではないでしょうか。もちろんそれは、楽観主義とも、また単なる理想主義とも違うものです。このような希望は、厳しい現実を耐えて生きなければならぬ人間の、いわば悲しみに満ちた希望とも呼ぶべきものでしょう。人間は、希望なしには生きていけない存在なのです。

「神の前に豊かになる生き方とは」

大学宗教研主任 出村 みや子

ルカによる福音書、第二章一三節～二二節

13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」 14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」 15 そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」 16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18 やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまし、19 こう自分言ってやるのだ。』さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しむ』と。20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

勉強に読書にスポーツに、よい秋の季節となりました。今日お読みした聖書の箇所は、福音書に数多く収録された主イエスの語られた譬え話のひとつで、学生時代に大学礼拝で初めて耳にしたときに大変印象深く聞いた思い出があります。この譬えは、群集の一人がイエスに対し、兄弟間の遺産相続をめぐる争いを調停して欲しいというある人の求めを、イエスがいったん退けられた後に導入されています。ある金持ちの畑が豊作で、作物をしまふ場所がないほどに沢山の収穫を得たので、もっと大きな倉に建て替え、今後は仕事を休んで飲み食いして楽しもうと言った。この金持ちに対して神は、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったい誰のものになるのか」と告げたという話です。皆さんはこの譬え話にどのような印象を受けられたでしょうか。

主イエスによってこの譬え話が語られた依頼者は果たして貪欲な人だったのでしょうか。聖書には何も記されていません。むしろこの人は、兄弟に遺産を独り占めされてしまい、気の毒な立場に置かれているように思われるので、なぜイエスがこの人の依頼を退けたのか、疑問に思う方も少なくないと思います。ここでこの短い譬え話が、一五節の「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい」という言葉と、二一節の「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」という主イエスによる貪欲に対する二つの警告の言葉の間に挟まれていること、さらにこれらの警告と譬えが調停を依頼した当人のみならず、その場に居合わせた一同に対して語られている

ことに注意したいと思います。

結局主イエスは、この依頼者の求めに応じて遺産相続の調停をすることはありませんでしたが、この箇所から私たちは、この世の富と関わる際に留意すべき点が永遠の地平から、いわば問いとして投げかけられていることに気付きます。二〇節をご覧下さい。神は「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、一体誰のものになるのか」と問いかけています。この神の問いかけを聞いてはっとした人は、昔も今も少なくはなかったでしょう。この問いは永遠の地平から、私たちが日頃重大に考えているこの世の様々な営みが、人間の思いのままになることのない命の有限さという厳粛な定めの前に、突如として色あせてしまうほどの衝撃をもって語られているのです。

このメッセージが現代日本の文脈において重要であると思われるのは、富との適切なかかわり方が欠如したところでは、神の似像 (imago Dei) として創造された人としての尊厳ある生き方が見失われてしまうのみならず、人と人との関係も崩れてしまうことを示しているからです。今日世界的規模で進行している途上国の貧困と飢餓の問題は、一部の先進国による富の独占と近い原因です。また今日では、金銭欲の犠牲となって職を失い、家庭崩壊を招いてしまう人や、他者の財産や、あるいは命すら奪ってしまう人は絶えないのです。

ここで旧約聖書の有名なヨセフ物語（創世記三七―五〇章）に触れたいと思います。授業で学ん

だ方も多いと思いますが、ルカの愚かな金持ちとは違い、ヨセフも豊かな豊作のときに巨大な倉庫を建てますが、それを人々の命の危機を救うことに役立てた人物として、また過去に憎みあった兄弟との和解を果たした人物として旧約聖書に語られています。小さな頃から自分の夢解きの才能を自慢にしていたヨセフは、とうとうお兄さんたちの妬みを受けてエジプト行き商隊に売られてしまいます。しかしヨセフはその後自らの夢占いの才能を活用してたくましくエジプト社会で生き延び、来るべき飢饉の時を予告して、巨大な倉庫を建てることを進言して食料を備蓄させ、エジプトの食料長官として民の危機を救うのです。近隣諸国からも食料を求めてやってきた人々の中に、かつて自分を売った兄たちもいました。ヨセフはその兄たちとの数奇なめぐり合わせに驚きながらも、兄弟たちの危機を救い、兄たちと心からの和解をするという物語です。過去のヨセフに対する仕打ちを悔いる兄たちに対して、ヨセフは「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」と優しく語りかけました（五〇章二〇節）。ヨセフは、イエスの譬え話の金持ちとは違い、自分のために倉を建てたのではありませんでした。むしろヨセフはその豊かな才能を徐々に人のために活用することを学んできた人でした。

このようにこの世の富との適切な関わりや貪欲への警告は、聖書全体がさまざまな形で告げているメッセージであります。今日お読みしたルカ福音書のテキストの次に続く記事の末尾、一二章三

三節に「擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」という言葉があり、また一六章三節にも「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」という主イエスの言葉がありますが、これらの言葉はその後の古代地中海世界における様々な禁欲主義運動の展開や修道院制の成立など、キリスト教の歴史に大きな影響を及ぼしてきました。さらに近代になると、デンマークの実存主義哲学者キルケゴール（一八一三〜五五）は、人間の尊厳という問題について次のような示唆的な言葉を残しています。「自己をはかる尺度は、つねに自己が何に對して自己であるかというところにある。これはまた「尺度」の定義である」、そして「自己がもし神を尺度となしえたならば、なんと無限のアクセントが自己の上に置かれることであろう」と述べ、「人が神の前に立っていることを意識したときに、はじめてそれは無限な自己となるのだ」と語っているのです（『死に至る病』第二部A第一章、引用は『キルケゴール全集』11、白水社、松浪信三郎訳による）。

もう一度ルカ福音書のテキストに戻しましょう。先ほどイエスに兄弟の遺産相続の依頼をした人は、この主イエスの譬え話をどのように受け取ったのでしょうか。その後、遺産を巡って争いをしていた兄弟とはうまく話し合いがついたのでしょうか。この人は主イエスとの一度限りの出合いを通して、その後の生き方がどのように変えられていったのでしょうか。秋の豊かな収穫の時を迎え

るたびに、私は学生時代に出会ったこの印象的な譬え話を通じて、神の前に豊かになる人間の生き方についていろいろと考えさせられるのです。

「働くということ」

大学宗教研主任 村上 しみか

ローマの信徒への手紙、第十二章一〜八節

1 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。

2 あなたがたはこの世に倣ってはいけません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

…わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、⁵わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。⁶わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていきますから、預言の賜物を受けていけば、信仰に応じて預言し、⁷奉仕の賜物を受けていけば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えるに、⁸勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

この三月、社会へ巣立って行ったゼミ生の一人が、卒業前のあるとき、気落ちした様子で現れました。どうしたのかと尋ねると、彼は入社前の研修に参加して、そこで見た現実に失望したということです。その会社では顧客に対する態度が取引の大きさに応じて違い、取引の大きな相手には十分な配慮をもって丁寧な、そして取引の小さな相手には適当に対応するのだということです。そのような光景を見て、彼はこれからその職場で働いていくことに疑問を覚えたようでした。そして彼はこう言いました。「僕は、本当は人の役に立つ仕事をしたかったんだ」。確かに彼は以前から、「困っている人の役に立つような仕事がしたい。たとえば精神的に悩んでいる人の力になれるカウンセラーになれたら」と将来の夢を語っていました。しかしそのためには新たに勉強を始めねばならず、まずは経済的に自立しようと、彼は就職する道を選んだのです。しかしその就職先で社会の現実を目の当たりにして、やはりこれでいいのだろうか、彼は新たに悩み始めたのです。その彼に私は問い返しました。「人の役に立つ仕事、人の役に立つ職業というのは果たしてあるのだろうか。」

私たちは漠然と世の中には人の役に立つ仕事があると思っています。たとえば医師や看護師、あるいは弁護士や警察官……。弱っている人、困っている人を助ける仕事です。それでは他の仕事は役に立たない仕事でしょうか。ある音楽家の友人は、好きなことを職業にしたことに後ろめたさをもっていて、いつも「やくざな仕事をしています」といって、自分の仕事を卑下していました。彼はおそらく、自分は好きなことばかりやっていて、社会や人の役に立っていないと思っていたのでしょ

う。しかし果たしてそうなのでしょうか。あるいは物を売って利益を得る「商売」という仕事は、ヨーロッパの歴史の中で長く軽蔑されてきました。自分では何も作り出すことをせず、人の作ったものをただ渡すだけで利益を得るといふそのあり方、そして彼らの売る商品が人々の欲望を掻き立てて贅沢を助長し、人間を道徳的に墮落させてしまうというのが、その理由でした。果たしてそうなのでしょうか。世の中には「役に立つ仕事」と「役に立たない仕事」があるのでしょいか。

パウロはそのような見方とは異なった視点から「働く」ことについて教えてくれています。彼は言います。「私たちは一人ひとり、異なった賜物を与えられていますから、それに応じて働きなさい。」「預言の賜物を受けている人は、預言し、奉仕の賜物を受けていけば、奉仕に専念し、教える人は教えに精を出しなさい。」つまり、それぞれ自分にどのような賜物が与えられているか良く考え、それを十分に用いて、それを十分に生かして働きなさいということです。そしてその際、その賜物を自分のために用いるのではなく、神に捧げる思いをもって用いてゆくということ、すなわち何が神の御心で、何が神に喜ばれる善いことであるのかを問いつつ働くことをパウロは教えたのです。これは一般の考えとは随分異なるでしょう。何のために働いているかと問われると、おそらく多くの人はこのように答えるでしょう。収入を得るため、自己実現のため、あるいは社会的な地位や評価を得るため……。現代はそれが当たり前のように思われている時代です。しかしパウロの視点からすると、これはどれも自分のためにする働きということになります。そのような働きではなく

て、まず自分に与えられた賜物を知って、それを謙虚に受け止め、自分に与えられた能力や時間をもっと何が出来るのかを考える。何が神に喜ばれ、何人が人に喜ばれるのかを考えつつ、働く―これが大切だということです。だから「役に立つ仕事」と「役に立たない仕事」があるのではなく、どの様な仕事であれ、人がこのような思いをもって働くとき、それは「役に立つ仕事」になる可能性が開かれるのです。音楽家は自分の好きな音楽を通して、人々の心に喜びや慰めを与えることが出来るでしょう。また商売をする人も、人々が自分では手に入れられないものを遠くから運んできて、人々の生活を豊かに彩るといふ意義ある働きができるのです。

このように自分のためでなく、自らを超えて神を思い、人を思いつつなされる働きは、豊かな世界を創り出します。皆さんも経験があるでしょう。誰かに何かを無条件に差し出されたとき、人は豊かな思いに満たされるものです。そして一人ひとりが異なった賜物をもっているわけですから、それが差し出されて互いに分かち合われたとき、自分ひとりでは創り出すことの出来ない豊かな世界が生まれるはずですよ。

みなさんも自分に与えられた賜物を良く知って、これで何が出来るのかを考え、それが豊かな形で発揮されるよう、よい準備を行ってください。そして自分にはそれほど能力もないし、何も出来ないなんて言わないでください。それは与えられた賜物をまだ見つけられていないか、見つけていてもそれをういようと努力していないかのどちらかなのです。時間がかかるかもしれませんが、自

分をよく見て、見つけられたら、それがよい実を結ぶよう、準備をしてください。そしてこの殺伐とした現代の社会にあって、豊かな世界を創り出す人となってください。

「人生の迷いの解決」

キリスト教学科長 原 口 尚 彰

詩編、第二一九章九〜一六節

9 どのようにして、若者は歩む道を清めるべきでしょうか。

あなたの御言葉どおりに道を保つことです。

10 心を尽くしてわたしはあなたを尋ね求めます。

11 わたしは仰せを心に納めています

あなたに対して過ちを犯すことのないように。

12 主よ、あなたをたたえます。

あなたの掟を教えてください。

13 あなたの口から与えられた裁きを

わたしの唇がひとつひとつ物語りますように。

14 どのような財宝よりも

あなたの定めに従う道を喜びとしますように。

15 わたしはあなたの命令に心を砕き

あなたの道に目を注ぎます。

¹⁶わたしはあなたの掟を樂しみとし

御言葉を決して忘れません。

詩編一九編は、旧約聖書の一五〇編の詩編の中で最も長いもので、二二の連より構成されています。しかも、二二連の各行は、ヘブライ語のアルファベットの文字で始まっており、イロハ歌となっています。日本語訳の訳者もそのことに読者の注目を促して、括弧付きで注記をしています。かなり注意深い読者でなければ、そのことに気付かないのではないのでしょうか。しかし、ヘブライ語原典を見ると一目瞭然で、ヘブライ語のアルファベットの二二文字が綺麗に並んでいるのが、視覚的に確認出来ます。

詩編一九編の主題は、詩編一編と同様に、主の律法を守る者の幸いです。旧約聖書の信仰者に取り、律法の言葉は守らなければいけない戒めであると同時に、人間が幸福に到る道を示す道しるべでした。律法の言葉は、詩一九・一〇五において「道の光」と呼ばれているのです。

この詩編の九一〇節に注目してみたいと思います。この部分は新共同訳聖書では、次のようになっています。

「どのようにして、若者は歩む道を清めるべきでしょうか。

あなたの御言葉どおりに道を保つことです。

心を尽くしてわたしはあなたを尋ね求めます。

あなたの戒めから迷い出ることのないようにしてください。」

九節の後半の言葉を直訳すれば、「あなたの御言葉の通りに守るためです。」となり、そのように訳している訳もあります。旧約聖書の言葉の通りに、神の戒めを守ることが、「歩む道を清める」ことに他ならないと言う訳です。一〇節では、詩編の作者は、自分が「戒めから迷い出ることのないように」と神に祈り求めています。実は、この詩編全体は、「わたしが小羊のように失われ、迷うとき、どうかあなたの僕を探してください。あなたの戒めをわたしは決して忘れません。」（一七六節）という、詩編の作者の願いと決意表明で終わっています。つまり、この作者は人間は本来の道から外れたくないという希望を持つのだが、そう努力しても迷うものであるという認識を持ってきます。しかし、現実には迷ってしまったら、どうすれば良いのかという問題が生じます。これだけ真剣に神の戒めを守ろうとする信仰者だから、本来の道に立ち返る自己努力をするでしょうが、自分を迷いからそこから立ち返らせる力は自分の外から、つまり神から来ると考え、神に自分を探し求めて欲しいと祈っています。

私たちは旧約聖書に加えて新約聖書を持っています。新約聖書は勿論イエス・キリストの福音（良い知らせ）を語る書物です。従って、私たちが、「御言葉」と言うときは、詩編の作者とは違い、

旧約聖書の律法の言葉だけでなく、旧新約聖書全体を通して語られている言葉、特に、キリストにおける救いということの内容とする言葉を考えます。キリストの福音を語る福音書 of 言葉の中にも迷える羊の話は出て来る訳で（マタイ一八・一〇—一四、ルカ一五・三一—三七）、人間は迷いやすい羊のような存在であるという認識は、旧約も新約も同一です。人間は誰も迷いたいとは思っていませんが、現実には自分が進んで行く方向についてあれかこれか決心がつかないことがあります。自分が今どこにいてどこに進んでいるか皆目見当がつかないこともあります。或いは、本来行くべき道は分かっているけれども、そこから外れてしまうことがあります。迷いの原因が実生活上のことならであれば、よく調べて考えたり、知り合いや教師に相談し、助言を貰うような解決法もあるでしょうし、そうすることが望ましいと言えます。しかし、聖書が問題にしているのは、神の前にあるべき道から外れること、つまり、罪に迷うことだから、自己努力には限界があり、自己努力をしようとするばする程自縄自縛になり、解決から遠いてしまいます。

この問題の解決は、実は旧約聖書にはなく、新約聖書の方に示されています。旧約聖書は開かれた書物であり、様々な問いがそこでは提出されるのだが、答えがない場合があります。これに対して、新約聖書は提示された問いに対する究極的な回答を示しています。イエスが語った迷える羊の話では、九九匹を荒野に残しても迷った一匹の羊を探し求め、見つけ出して連れ帰る羊飼いの姿を通して、迷った罪人を探し求める神の姿、罪人の悔い改めに喜ぶ神の姿を描いています。イエス・

キリスト自身がこの世にやって来て、罪人とされる人々と交わり、悔い改めに導いたのは、迷った罪人へ向けられた神の愛を自ら実践したということです。これこそ、詩編一一九編に表明された願いに對する神の答えに他なりません。迷った者に対する神の愛と配慮ということを感じて歩んで行きたいのです。

非理性的・非合理的囚われからの救い

文学部教授 平河内 健 治

マタイによる福音書、第二十五章一四〜三〇節

14 「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。15 それぞれの力にに応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、16 五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。17 同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。18 しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。19 さて、かなり日がたつてから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。20 まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』21 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒喜んでくれ。』22 次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』23 主人は

言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』²⁴ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、²⁵恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』²⁶主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。』²⁷それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。²⁸さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。²⁹だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。³⁰この役に立たない僕を外暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎりするだろう。』

今年も志の高い新入生をたくさん迎えることができました。文経法の三年生の皆さんは、土樋のキャンパスに移り、それぞれの専門の科目をさらに深く学ぶ決意を新たにしているかと想います。四年生の皆さんは、進路の決定に心穏やかならぬ日々を送っている人も多いのではないのでしょうか。ここでは、新年度にあたっての私自身の皆さんに対する期待と願いを三つに纏めてお伝えしたいと

思います。これはキリストの僕たらんとしている私自身の決意と祈りでもあり、神様への応答でもあります。

一つは、すでに神の恵みとして生来与えられている成長する力を信じて欲しい、また、私自身信じ続けたいということでもあります。この成長へと向かう資質は、自ら邪魔をしない限り、また、他人によって邪魔をされない限り、また、邪魔をされたと受け止めない限り、自ずと発揮されるものであります。私たちは生きる方向へと向かうように神様から創造されています。お互い邪魔しないよう、むしろ、それを促進するよう努めたいのであります。

もう一つは、『論語』の「学びて時にこれを習う。また、説よむばしからずや」の「習う」ということ、つまり、「学んだことをやってみる」ということを大事にして欲しい、大事にしたいということでもあります。たとえ、力はあっても、これを使ってみなければ、どれだけの力があるかわからないし、実感も湧いて来ないからであります。

三つ目は、大学は高校と異なり、自分で選択すること、自分で決断しなければならぬことが多い、戸惑うことが多いところかと思いますが、そのこと事態に意味があるということでもあります。新三年生はキャンパス環境が違っただけで、雰囲気慣れ親しめず、また、誰に声をかければいいのかと心配になるかと思えます。新四年生は就職のことで、頭を悩まし、取り越し苦労をしてしまい、思い煩うことも多いかと思えます。なかなか、自分で決断するのが辛いと感じることが多いか

と思います。しかし、迷うことはいいことなのです。自由に迷える中で、様々な発見や人間関係の豊かさが生まれます。今ある迷いの現実を恵みとして、試練として、神の摂理として、大事に受け止めて欲しいということがあります。

これらのことを教えているのが、ただ今読みましたタラントンのたとえ話です。ある人が旅行に出かける時に、使用人に自分の財産を預けた。それぞれの力にに応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントン預けた。五タラントンの者と二タラントンの者は商売をして二倍にした。一タラントンの者はご主人が厳しい人だからと地の中に隠しておいた。主人が帰ってきて、最初の二人は忠実な僕だと誉められ、もっと多くのものを管理する責任が与えられた。一タラントンの者は、怠け者の悪い僕だ、銀行に預けておいたら、利息付で返してもらえたのにと叱られ、解雇されます。

タラントンは英訳聖書では、talent (能力) という言葉で示されております。タラントンは能力を意味します。一タラントンの僕は、能力を使っていない。やってみることをしていません。自分の力を試していない。あるいは、力を貯めておき、熟成を待つこともしていません。自分の力に実感をもっていない。神様から与えられた力を育ててくださる、成長させてくださる神の導きを信じていない。まさに、宝の持ち腐れであります。

さらに、悪いことに、この僕のご主人がまかないところから刈り、散らさないところから集める

厳しい人であることを承知しておりました。「厳しいご主人のこのお金を失ってはいけない」、「損をしてはならない」、「ご主人に叱られるようであってはならない」という思いに囚われ、恐ろしくなり、銀行に預けるという知恵も浮かばず、地の中に隠していました。

心理療法の一つに論理療法というものがあります。この基本的考えは、不安や恐怖、鬱の感情はきっかけとなる出来事から生まれるのではなく、理性的・合理的でない信念から生まれるというものです。例えば、私の昨年の授業を高く評価してくれた学生さんは比較的多くおりました。しかし、何人かが声が小さい、黒板の字が読みにくい、丁寧すぎる、テキストを全部終わらせて欲しいといったコメントをします。これだけで、気が滅入ったり、学生さん分かってないな！という怒りが湧いてきます。ここには、「私の授業に満足するものは全員でなければならぬ」という非合理的な信念があります。そこから嫌な感情を自ら作り出しています。しかし、「そうでなければならぬ」という根拠は一つもない。論理療法はこのような信念を論駁するよう勧めます。全員に満足してもえれば、これにこしたことはないが、そうでなくとも、教師失格というわけではない。否定的コメントはむしろ自分を高めてくれる。学生との交流が絶えたわけではない。むしろ、望ましいこと。今後の糧にしようといった、効果的な新たな考えが与えられ、氣力を回復し、氣の滅入りは消えてゆきます。

「ねばならない」とか「こうあってはならない」といった要求を自分や他人、環境に求めている

限りは、人生に満足することはできません。しかし、愚かにも、私たちはこのような囚われにあることに気がつかないで悶々としております。イエスはこのたとえ話を通して、このような私たちに気付くよう求めています。そこに救いがあるからです。

二一節と二三節に、「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」とあります。自分の能力が貧弱であると僻んでしまったり、過信をして驕ることなく、たとえ最初は少しのものとしか実感がなくとも、神の恵みに感謝し、信じ、能力を用いて、共々に成長できることを祈りたいと思います。

建学の精神と校歌

文学部教授 志子田 光 雄

ヨハネによる福音書、第三章一六〜二一節

16 神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によつて世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになつている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたというところが、明らかになるために。」

もう一箇所、今読みましたヨハネによる福音書の記者と同一であると言われているヨハネによる手紙一からの一節、場所も同じ三章一六節です。偶然ですが、同一の関連内容となっています。

ヨハネの手紙一、第三章一六節

16 イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。

どの私立学校にも、しっかりした学校であるなら、建学の精神というものがあり、それに基づいて教育がなされております。東北学院でも、建学の精神として、「献身犠牲」とか「世の光、地の塩」、あるいは「3L精神」ということが言われてきました。とりわけ3L精神ということがよく口にされ、『日本キリスト教史大事典』の東北学院のコラムでも、「3L精神」が紹介されています。3Lとは言うまでもなく、LIFE (命) / LIGHT (光) / LOVE (愛) です。

この三文字 LIFE, LIGHT, LOVE は、校歌の中にもはっきり歌われていることは皆さんご存知であると思います。以下においては、必ずしもその歌詞の意味が正確に理解されていないと思われる校歌とのかかわりで、3L精神を考えてみたいと思います。

第一に LIFE (命) についてですが、校歌の四節に「命を捧げし、真の人、謳わるるいずこ、あ東北学院」とあります。この「命を捧げし、真の人」とはどのような人なのでしょう。献身犠牲の精神でこの世に尽くした偉大なる人物、そのような人物を東北学院が輩出しているということなのでしょう。それも解釈可能ですが、「真の人」ということが問題です。「命を捧げし真の人」

とは、第一義的には、そのような立派な、あるいは偉大な人間のことでないのです。校歌の「真の人」とは、神に背いた人間を神と和解させるために、神の子であることに固執せず、肉体の形をとって人ととなり、十字架の上に犠牲になった、すなわち生命を捨てて神と人とを和解させたイエス・キリストを指します。昭和三年から五年まで東北学院で音楽を教えていた同窓生の安部正義先生が作曲された讚美歌一・二・三番の四節の歌詞（柚木康作詞）には「すべてのものをあたえしすえ、死のほかなにもむくいられで、十字架の上にあげられつつ、敵をゆるししこの人を見よ」とありますが、「この人」、すなわち「人となりたる」主イエス・キリストに他ならないのです。この主イエスが「謳われるのはいずこ」と校歌は問いかけ、東北学院こそがその場所なのであると言っているのです。「謳われるはいずこ」の文句は、礼拝堂の脇にある歌碑では「歌われる」になっておりますが、本来の文言では「謳われる」であり、徳などを称えてうたう、褒め称えるということであり、英語でいうならば *sing*（歌う）ではなく、*extol*（褒めそやす）なのです。したがって、校歌の「命を捧げし真の人」とは、「人類の罪の贖いのために十字架上に生命を捧げた真の人」イエスのことでもあります。そのイエスを称え、われわれがそのイエスに倣うとき、「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命にいたる。」（ヨハネによる福音書第二章二五節）という主イエスの御言葉が真実になるのです。このような理解をしたときにはじめて、校歌の「命を捧げし真の人」は、人間のレベルに当てはめられて、東北学院に連なる者に、犠

牲的精神を促してくるのです。

LIGHT (光) ももちろん校歌にあります。リフレインの「世の光、我が誇り」です。「世の光」とは、ヨハネによる福音書第八章一二節に「私は世の光である」とあるように、本来はイエス・キリストご自身のことです。冒頭に捧げたヨハネによる福音書第三章一九節では「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ」とあります。「世に来た光」とはキリストご自身を指しますが、同時にまた、イエスはいわゆる山上の説教で「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。」(マタイによる福音書第五章一四節)と言っているように、この「世の光」はキリストを信ずる人々をも指しています。したがって、校歌は、東北学院は「世の光であるキリスト」を誇りとするとともに、イエスが「あなたがたは世の光である」と言われたように、「東北学院に連なる者は世の光でなければならぬ」と歌っているのです。

LOVE (愛) も校歌にあります。三番の歌詞に「いくよ培いし大和心、神の愛に咲く、ああ東北学院」とあります。神のレベルでの愛は、ヨハネによる福音書第三章一六節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」とある「神の愛」です。そして、今度は、ヨハネによる手紙一の第三章一六節にあるように「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。」とあるように、この神の愛をモデルにし、この世の愛、そして東北学院に連なるもの

が抱く愛も、犠牲的精神に裏づけされた愛でなければならぬ、と説いているのです。

要約すれば、「命を捧げた」イエスの犠牲によってわれわれは永遠の命を約束されるという信仰をもって「命」をも捧げる献身犠牲の精神を抱き、「世の光」なるキリストに倣ってわれわれ自身が世の「光」になるべく努力をなし、独り子をこの世に下したもうたほどに世を愛した「神の愛」をモデルとした犠牲的「愛」を實踐する人になることを、この「L」精神はわれわれに勧めているのです。

LIFE, LIGHT, LOVEの三文字は、東北学院の創立の母体であるアメリカのリフォームド・チャーチ（改革派教会）が一八九一年（東北学院が創立された三年後）に創刊された月刊誌の表紙に、次のようにはっきりと記されています。「Life, Light and Love for the World」すなわち「世界のための命、光、そして愛」です。LIFE, LIGHT, LOVEは、東北学院創立の母体であるリフォームド・チャーチのモットーであったのです。

東北学院の創設期より半世紀近くにわたって東北学院のために生涯を捧げたシュネーター院長は、「命と光と愛とは将来の日本人が是非備えなければならぬ資格であり、そのとき日本人はまた人類の一人として光輝ある生涯を送ることができるであろう」と述べております。私たちはこのLIFE, LIGHT, LOVEを、この東北学院の創立の精神を表すきわめて明確な表現として、東北学院の校歌とともに体得し、実現してゆかなければならないと思います。

（二〇〇〇年五月一六日 ラーハウザー記念礼拝堂に於ける説教より）

「命を救うことか、滅ぼすことか」

経済学部准教授 松村尚彦

ルカによる福音書、第六章六〜一節

6 また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入^{はい}って教^{おし}えておられた。そこに一人^{ひとり}の人がいて、その右^{みぎ}手が萎^なえていた。7 律法学者^{りっぽうがくしゃ}たちやファリサイ派^はの人々^{ひとびと}は、訴^{うった}える口実^{くつじつ}を見^みつけようとして、イエスが安息日^{あんそくび}に病氣^{びやうき}をいやされるかどうか、注^{ちゆう}目^{もく}していた。8 イエスは彼ら^{かれら}の考^{かんが}えを見^み抜^ぬいて、手^ての萎^なえた人^{ひと}に、「立^たって、真^まん中^{なか}に出^でてきなさい」と言^いわれた。その人^{ひと}は身^みを起^おこして立^たった。9 そこで、イエスは言^いわれた。「あなたたちに尋^{たず}ねたい。安息日^{あんそくび}に律法^{りっぽう}で許^{ゆる}されているのは、善^{ぜん}を行^{おこな}うことか、悪^{あく}を行^{おこな}うことか。命^{いのち}を救^{すく}うことか、滅^{ほろ}ぼすことか。」10 そして、彼ら^{かれら}一同^{いちどう}を見^み回^{まわ}して、その人^{ひと}に、「手^てを伸^のばしなさい」と言^いわれた。言^いわれたよ^うにすると、手^ては元^{もと}どおりにな^なった。11 ところが、彼ら^{かれら}は怒^{いか}り狂^{くる}って、イエスを何^{なん}とかしよ^うと話^{はな}し合^あった。

私たちは、日曜日になると仕事や学校を休んで遊びに行ったり、家で好きなことをしたり、休養を取ったりすることができます。学生の皆さんは、夏休みがあり、春休みもありますので、日曜日

の有難さはそれほど感じないかもしれません。しかし皆さんも、社会に出て仕事を持つようになる
と、一週間に一度休むことの有難さが身にしみて分かるようになるでしょう。肉体的にも精神的に
も、私たちには適度な休息が必要です。

日曜日に休むという習慣が、キリスト教の習慣に由来することは、皆さんもご存知のことだと思
います。そしてもう少し歴史を調べてみると、この一週間に一度仕事を休むという習慣は、キリス
ト教よりも更に古く、キリスト教の母体となった古代のユダヤ教の律法からきていることが分か
ります。それが今日お読みした聖書の箇所に出てくる安息日と呼ばれる特別な日のことです。

先ほどの聖書の箇所は、この安息日という特別な日をめぐって、イエスと、律法学者やファリサ
イ派と呼ばれる宗教の専門家とが、激しくぶつかったということを伝えていきます。この対立の結果、
律法学者やファリサイ派の人々は、「怒り狂って、イエスを何とかしよう」と話し合った」とありま
すので、これがただ事ではない非常に緊迫した出来事だったことが分かります。

それでは、どうして事態がそこまで緊迫することになったのでしょうか。今日の聖書の箇所を見
れば、イエスと律法学者及びパリサイ派の人々が対立した直接の原因は直に分かります。つまり、
安息日に右手の萎えた人を癒すことが律法に違反することかどうか、ということ巡って対立した
のです。

しかし更に聖書の箇所をよく読んでみると、そこには、単に律法違反かどうかということよりも、

もっとずっと根の深い問題があることに気付かされます。そこで今日は、この「根の深い問題」について、聖書の箇所に沿いながら、ひとつひとつ考えてゆくことにしましょう。

まず本日の聖書の箇所のはじめには、律法学者やファリサイ派の人々が、「訴える口実を見つけようとして」身構えていたと書かれています。つまり彼らは、はじめからイエスに対して、どうにかして陥れてやろうという悪意をもって、近寄っていったというのです。そこにはイエスの伝道活動によって、多くの民衆が律法学者やファリサイ派の人たちから離れてゆき、逆にイエスの方に人々が集まっていったことに対する腹立たしさと嫉妬とがありました。

この悪意に気付いたイエスは、律法学者やファリサイ派の人々を直接教え諭すのではなく、その代わりに、一人の右手の萎えた人に声をかけます。当時は病気や体の障害を持つ人は、その人が罪を犯したためだと考えられていました。このため人々から軽蔑され、蔑まれた目でみられる存在だったのです。ですから、この右手の萎えた人も、自分は皆から歓迎されていない人間なのだと感じつつ、おどおどとしながら会堂の隅で隠れるようにうずくまっていたことでしょう。その人に向かってイエスは「真ん中に出てきなさい」と声を掛けたのです。

ここから劇的な展開が始まります。まず聖書は、右手の萎えた人が「身を起こして立った」と記しています。それまでおどおどとしながら会堂の隅で隠れるようにうずくまっていたこの人が、イエスを声を掛けられることによって、まるで別人のようになってスクッと立ち上がった様子が目に

浮かびます。

自分は罪びとだから、皆に受け入れてもらえないんだという意識で打ちひしがれていたこの人が、今では迷うことなく立ち上がり、堂々とした姿でイエスの前に進み出ようとしている。彼がこれほど大きく変わったのはなぜでしょうか。それは恐らく、イエスに声を掛けてもらったことで、はじめ自分を全面的に受け入れてくれる方がいるという経験をし、人間としての自信を取り戻すことができたためでしょう。本当の意味でイエスに出会うということは、こうした変化と力とを人に呼び起こすものなのです。

さて、この人が一同の真ん中に進み出ると、イエスは、今度は律法学者やファリサイ派の人々に向かって、このように言いました。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」

確かに、安息日には仕事をしてはならないという決まりがありました。しかしそうであったとしても、目の前に病人がいれば、その人を助けることの方が、何もしていないよりも律法の精神にかなったことであるの言うまでもありません。ですから「命を救うことか、滅ぼすことか」というイエスの問いに対する答えは、誰にとっても明らかなことでした。しかし、そこに居合わせた一同は、何も答えることができず、黙りこくったままの沈黙が続きます。

そして皆が固唾を飲んで見守る中、会堂には「手を伸ばしなさい」というイエスの声だけが響き

ました。そして右手の萎えた人が、「言われたようにする」と「手は元どおりに」なったのです。

こうした奇跡が、どうして起きるのかは私にも分かりません。ただこの聖書の箇所にはひとつ大切なことが書かれています。それは右手の萎えた人が、イエスの「言われたように」したという記述です。「言われたように」した。この記述から、右手の萎えた人はこの時、イエスを全面的に信頼していたことが分かります。この信頼感は、先ほど言いましたように、右手の萎えた人が、イエスとの個人的な出会いを通じて、自分が全面的に受け入れられたという経験から生まれたものでしょう。

こうして右手の萎えた人は、右手が元通りになるだけでなく、自分が罪びとであるという劣等感も取り去られ、皆と共に生きて行くことのできる人間として回復することができたのです。人が人として回復した。これはその現場を目撃した人であれば、誰もがその人と一緒に喜ぶべき素晴らしい出来事でした。

ところが最初にも言いましたように、律法学者やファリサイ派の人々は、これをみて「怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った」というのです。皆で喜ぶべき場面で、「怒り狂った」。背筋が凍るような恐ろしい表現です。この本末転倒した態度は、いったいどこからくるのでしょうか。またこのような理不尽で頑なな態度は、果たして私たちとは全く無縁なものだと言えるのでしょうか。

ある心理学者によると、人がこうした理不尽な態度を示すときには、その人自身も気付いていない隠された怒りが潜んでいることが多いそうです。そしてこの隠された怒りは、最初は小さなことのように見えても、様々な出来事を通じて、人を傷つけ、攻撃し、破壊するエネルギーとなって現れ、時には自分と人との関係を破壊しつくしてしまうこともある恐ろしいものなのです。実際に、律法学者とファリサイ派の人々の場合この怒りは、イエスを十字架に掛けて殺すというところまでエスカレートしていったのです。

今日の聖書の箇所は、私たちのうちにもこうした闇の力が存在することを気づかせ、それらを照らし出すことによって、私たちが神様に立ち返ることを促しているのではないのでしょうか。もしイエスから「命を救うことと、滅ぼすこととどちらが正しいか」という問いかけがなされたら、私たちは、イエスを全面的に信頼して「命を救うことです」と直ちに答えることのできる者でありたいと思います。

「ベトザタの池」

工学部准教授 長 島 慎 二

ヨハネによる福音書、第五章二〜九節

2 エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。3 この回廊には、病気の人の目が見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。5 さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいた人がいた。6 イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。7 病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」8 イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」9 すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。その日は安息日であった。

エルサレムにベトザタという名の池があって、その回廊には病気の人の、目が見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていたと聖書には書いてあります。もとより、聖書に名を残した池があって、そこに横たわっている人々が病気の人、目が見えない人、足の不自

由な人、体の麻痺した人であるとすれば、彼らはただひなたぼっこをしていたはずありません。実は、この「ベトザタ」という名前は「あわれみの家」という意味を持っていて、池の水が動くときに水に入ると病気が癒されると信じられていたのです。それで、病気の人々が大勢その回廊に横になっていたのでした。その意味で、ベトザタは彼らにとっては希望でありました。しかし、そこになんと三十八年間も病気で苦しんでいる人が登場します。一口に三十八年と言いますが、もし、この人が生まれつき病気であったとすれば、今は三十八歳、元氣な十歳のこの頃に発病したとすれば、今は四十八歳、みなさんのような青春のただ中に発病したとすれば、すでに六十歳になんなんとする年齢なのです。おそらくは、当時の平均年齢が低かっただろうと想像することができま

すので、いわば彼は、その人生の大半を病気で苦しんできたことになりま

す。このように長い間病気が癒されなくて苦しんできたとなれば、誰だってもう病気が癒されるとい

う希望を持つことは困難でありま

しょう。ベトザタ、あわれみの家という名前の池の側にいな

がらも、癒されるとい

う希望を持つことが出来ないでいる。希望とともに、むしろ絶望を思い知ら

されている。何か、わたしたちの身の回りにも似たような事柄が有るように思

います。

この、恐らくは絶望の淵にあった人のところに、イエス・キリストがやって来たところから、その出来事は起こったのです。イエス様は、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病

気であるのを知って、「良くなり

たいか」と言われたのでした。「良くなり

たいか」なんて、当たり前

ではないかと思えます。しかし、それは、絶望の淵にあったその人に、改めて癒されることへの希望と意志を確認するためのものであったのでしょうか。実は、聖書に出てくる癒しの場面では、何時もイエス様は、「何をしてほしいのか」などのように、相手の希望を、気持ちを確認されます。それは、癒されたいとの自覚を促すとともに、イエス様に対する信頼と信仰を確認するものなのです。

イエス様の問いに対して、その病人は、「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」と答えています。ベトザタの池に來ている人々は、皆、何かしらの病氣を持っていて、癒されたいと願っていた人々なのでしょう。お互いに、病氣であることの辛さも理解出来る人たちだったはずですが、しかし、いざ、水が動いたとなると、隣にいる人のことは目には入らないのでしょうか。人間の心の貧しさが現れているというべきでしょうか。この病人にすれば、病氣であることに加えて、こうした隣人の助けを受けることが出来ないという惨めさをも加えて味わなければならなかったのです。

イエス様は、この人に向かつて、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」とおっしゃいました。病氣のため自分で動くこともできないこの病人に向かつて、「起き上がりなさい」とおっしゃったのです。このような会話は、普通わたしたちの間では成立しません。しかし、だからこそ、ここにイエス様がやってこられたことによる福音が示されているのです。この病人にとって、絶望の淵をさまよっていたはずの病人にとって、「起きあがりなさい」というイエス様の言葉を受け入れて、

起きあがろうとしなかったとしたら、もちろん起きあがることは出来なかったのです。聖書のことば、イエス・キリストのことばは、受け入れなければわからないものなのです。信仰は賭であると良く言われますが、イエス様のことばを受け入れるということは確かにそういうものなのです。

さて、現代においても、思い病気を負っている人、体の不自由な人が居ます。レーナ・マリアさんは、スウェーデン生まれの女性ですが、サリドマイドの薬の副作用で生まれつき両腕がなく、左脚が右脚の半分の長さしかないという重い障害を負いました。しかし、ご両親は、マリアさんを普通の小中学校に通わせ、今は、キリスト教信仰に基づいた音楽活動をしています。マリアさんは、まさしく、信仰によって立ち上がる者となったのです。

実は、この聖書の箇所から学ぶべき最も重要なことは、この病人がイエス様の言葉を受け入れて自分の足で起きあがる勇氣を持ったことでしょう。考えてみれば、わたしたちもいろいろな意味で苦しみがあり、不自由があるものです。わたしたちも実は、良く「わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。」と絶望しているのではないでしょうか。さあ、わたしたちも起きあがりましょう。イエス様のことばを受け入れるとき、わたしたちは新しい自分へと変えられるのです。

ことばの不自由な人をことばを用いて癒す

教養学部教授 渡部 敏

マルコによる福音書、第七章三一―三七節

31 それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。32 人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。33 そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。34 そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エツファタ」と言われた。これは、「開け」という意味でもある。35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話すことができるようになった。36 イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。37 そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてください。」

ずっとマルコの福音書を学んでいます、今日の箇所は、耳が聞こえず、口が廻らないという人

の話です。皆さんは耳が聞こえないということを想像できるでしょうか。中耳炎などになったことのある人は、想像できるかもしれません。私も一時期難聴になりました。とても恐ろしいことです。隣のひそひそ話が聞こえないのです。この人の場合、聞こえないことがどれほどひどいものだったかはよく分かりませんが、口を効けないわけですから、この人が自分でイエス様のところに来たいと言ったはずはないでしょうから、誰かが連れて来てくれたのです。

この場所はデカポリスという名前の所で、デカは十、ポリスは町・都市ですから、「十の町」という意味の地方です。位置はガリラヤ湖の東側に当たります。主イエス様は、その前の段階でどこに居られたかと言いますと、ティルスの地方に居られました。ティルスとは前の訳ではツロといわれていた所です。ツロというのは、地中海の一番東側であり、その辺りにはフェニキアという国がありました。それは歴史上大変有名な所です。文字がそのところから生まれたという伝説があるのです。フェニキア文字がアルファベットの基になったと言われております。そのようなツロ、すなわちティルスからシドンの方、北の方に何キロか行きまして、それからずうっと廻って、すごい遠回りをして、ガリラヤ湖の所まで来ました。なぜそのような遠回りしたのでしょうか。ある説によれば、イエス様を受け入れないという動きがその当時その地方にあったようです。そのためイエス様を受け入れない地方を避けて、その周辺の所を通って来たら、デカポリスと所まで来たということになったのです。イエス様は疲れていたのでしょうか、あまり人々とお話をしていなかった。そ

ここに癒しを求める人が来たのです。

そこでイエス様はその人だけを連れて、今読んだような形で、耳に指を差し入れ、舌につばをつけて触って、「エファタ」というお言葉で癒されました。ギリシャ語で書かれている新約聖書の中で、イエス様の使われている言語が出てくる時が時々ありますが、これもそういう箇所のひとつです。この言葉が効を奏したのでしょうか、その人は耳が聞こえるようになりました。話せるようになったのです。悪霊の仕業だったのでしょうか。お言葉をもって命令して癒しの業をなさいました。

この記事の前の箇所によると、当時、この地方には、悪霊がすごい勢いではびこっていました。ゲラサという所では、レギオンⅡ六千人の軍団にも匹敵するような悪霊の集団が、たった一人に憑いていました。イエス様はここでも、お言葉によって悪霊に出てゆくように命令されました。悪霊たちは、イエス様に追い出されるのがいやで、生き延びるために、たまたまそこに放牧されていた豚の群れのところに入ることを許してくださいと願いました。豚としても生きようとしたのです。悪霊は豚としても生き延びればいいと思ったのでしょうか。しかし、悪霊が豚に乗り移った途端に、豚は驚いたのでしょうか、豚は暴走してガリラヤ湖になだれを打って入って行って全部溺れて死んでしまいました。悪霊たちもそこで死んでしまったということで、イエス様に滅ぼされてしまったのです。そこまで読み込むことができるのではないかと思います。

今日の記事では、最後のところで、「この方のなさったことは素晴らしい。耳の聞こえない人を

聞こえるようにして、口の効けない人を話せる様にしてくださった。」と言って驚いた、と書いてあります。聖書の中で、驚いたという言葉も、イエス様の奇跡とともにしばしば現れます。しかし、イエス様はその奇跡を見世物にする積りはさらさらありませんでした。だから、ご自分のなさったことを、口外しないようにと口止めなさったのです。私たちは、とかく見世物Ⅱイベントの方を大事にしてしまつて、イベントをなさった方が、どういう気持ちでなさったかということ、そちらの方を考えることが、とても少なくなっているように思えます。

私たちにとつて一番大切な事は、イエス様との人格的な交わりをするということです。それは私たち人間の特権でもあります。言葉をもたない動物とは言葉で交流することは出来ません。言葉が違つても交流することが困難です。しかし、私たちは言葉によって生きています。言葉が文化を創ります。言葉によって文化を伝えます。良くも悪くも言葉によって私達は生きています。そして、聖書はこの言葉が神であったと、「ロゴスは神であった」とおっしゃいます。私たちも学びにおいて、日常生活において、この与えられている言葉の力を大切にしていきたいと思つています。

「テゼ共同体を訪ねて」

キリスト教科 佐藤 司 郎

エフエソの信徒への手紙、第五章一九節

19 霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かつて心からほめ歌いなさい。

今日は先月訪ねる機会のあったフランスのテゼ共同体について少し話してみたいと思います。

パリから特急列車とバスを乗り継いで三時間ぐらい南西の方角に行ったブルゴーニュ地方に、テゼという古い小さな村があります。ここにテゼ・コムノーテ（テゼ共同体）と呼ばれる、カトリックとプロテスタント出身のブラザー（兄弟）たちが祈りを中心にも共同生活している場所があります。年間をつうじて、夏は一週間で五千人もの若者が世界中から訪れるというところ、皆さんきっと驚くことでしょう。彼らはそこで賛美（テゼ共同体のオリジナルな歌）と聖書朗読と沈黙とからなる一日三回の礼拝に参加し、グループで聖書を学び、祈り、黙想し、交流を深めて帰って行きます。

テゼ共同体をはじめたのは、ロジェというスイス出身のプロテスタントの牧師です。彼は第二次世界大戦のさなか、争いのただ中に身をおいて和解のために祈りまた和解を生きる共同体を求めて、

彼の母の国フランスに移り、「ここにいてください。私たちは孤独なのです」という老女の願いにこたえてテゼ村に住むことを決意します。「私はテゼを選びました。その婦人が貧しかったからです」「キリストは貧しい人たちを通して語っておられます。彼らに耳を傾けることはよいことです。彼らとの交わりは信仰があいまいなもの非現実的なものとならないように守ってください」。テゼは当時ナチ占領地域と南の非占領地域の境界近くにあつて、ナチ支配から逃れてきた難民、多くはユダヤ人でしたが、彼らをロジエはかくまいスイスなどへの亡命の手助けをします。テゼ共同体の祈りに最初に加わつたのはそのようなユダヤ人など政治的難民でした。一九六〇年頃から、テゼは、多くの若者を迎えるようになります。一九八九年以降はとくに東ヨーロッパからの青年が多くなつていと聞いています。日本からの訪問者は必ずしも多くはありませんが、韓国人など、アジアから訪ねる人も多いのです。いまやまさに世界の若者の巡礼地のようです。

今回、もちろん礼拝にも参加しました。テゼのオリジナルの讚美歌をうたい、聖書の言葉に耳を傾けます。ここまでは、私たちのこの礼拝と変わりはありませんけれど、説教はなくて、沈黙です。黙想です。聖書の言葉を思いめぐらしながら、神を思い、自分を見つめる。厳肅な静かな礼拝です。きれいなりっぱな建物はありませんし、便利なものは何もありません。テントがはつてある巨大なキャンプ場のようですが、静かに自分を見つめ直し、神のこと、世界のことを考えるよい場所になっています。

テゼを支配している考え方のもっとも素晴らしい点は、神の前で自分を見つめるといふことと、他者に奉仕する、とくに貧しい人々に仕えるといふことが、分離していないといふところにあるように思います。自分を見つめる、むろんこれは悪くはない、しかしそれはしばしばただ自分の幸福だけに目がいつてしまうことになりがちです。そういう意味で現実からトランス「超越」してしまふことが起こりかねない。そうではない、神を思い、聖書を学び、自分を見つめることが、この世に向かうことへと、他のために自分が奉仕することへと結びつくといふこと、それが、私たちの学ばなければならないところです。私を案内してくれた人はカトリックの若いドイツ人でしたが、ここで一週間案内のボランティアをして、また帰って社会の中で働くのだと、はっきりしたドイツ語で説明してくれました。

さて今日の聖書の言葉は、テゼの礼拝を知っている人には身近に感じるでしょう。しかしそうでない人にも、新しい、豊かな響きを立ててここらに入ってくるはずで、神への思いに満たされること、それが私たちに他の人と語り合う道を開くのです。今日の聖句をもう一度に読んで祈りましょう、「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からはめ歌いなさい」。

(二〇〇七年一月二日 泉キャンパス)

honor the giver, and they take great pleasure in the gift. When we take good care of God's creation, we honor God, and we are able to enjoy the many gifts that come to us in that creation. Let us not only thank and praise God for his gifts that bring us so much pleasure, let us also honor God by becoming good *caretakers* of what God has given us.

For each of my daughters, her violin is a valuable gift that gives her much enjoyment. Let us say, however, that one of my daughters does not take good care of her violin. In such a case, two things will probably happen. First, I will be hurt and disappointed. I might wonder if my daughter was truly thankful for the gift I gave to her. Secondly, however, if she abuses (does not take good care of) her violin, she will no longer be able to enjoy the violin. The violin could break and become unusable. Even if the violin does not break, the tone of the violin can deteriorate if the wood is not cared for properly. In short, when my daughters accepted their violins as gifts, they also accepted the responsibility to care for those violins.

This is very similar to what the psalmist is telling us about our responsibility to "rule over" creation. The world God created for us is such an inestimably valuable gift, that if we are to receive it and take pleasure in it, we also must become its *caretakers*. If we abuse our natural and human worlds, God, who has given us these worlds, will be displeased by our negligence. Further, the more we abuse our world, the less we will be able to enjoy that world. If we pollute the air, we can become sick and unable to enjoy long hikes in the mountains. If ships continue to dump toxic waste like mercury in our oceans, gradually we will not be able to eat the fish that the ocean provides for us. We will no longer be able to enjoy a delicious piece of tuna.

Good rulers take good care of that over which they rule. They

(enjoying) his creation, God too is pleased.

But the psalmist adds something very interesting here. He tells us that God has made *us* the *rulers* over his wonderful creation. There is nothing wrong with taking pleasure in what God has given us. When a person, even God, gives a gift, one of the greatest pleasures for the giver is to see the receiver of the gift enjoy what he or she has received. We all know, however, that all gifts are not the same. Some gifts are inexpensive; they are not very valuable. For example, if a friend gives me a magazine she thinks I will enjoy reading, I appreciate her kind act. But my response does not involve a great sense of responsibility. I can read the magazine and then throw it away. My friend will not be offended if I do just that. Some gifts, however, are very valuable. When we receive a very valuable gift, it usually comes with a great responsibility. Indeed, sometimes we might even refuse to accept the gift because we don't want to accept the responsibility that comes with receiving the gift. For example, as many of you know, I play the violin and I also have two daughters that play the violin. Each of us has often performed at our chapel services here at Tohoku Gakuin. When my daughters began their careers in college, I gave both of them violins to play. When they accepted these violins, these gifts, each accepted the responsibility for taking good care of her violin. Each must always keep her violin in a safe place. She must take special care to prevent the violin from being damaged, for example, by dropping it. In short, each of my daughters has become the *caretaker* of her violin.

in which we live has been created by God. This is one reason he is praising God. In the Bible, the meaning of the word *praise* is very similar to the meaning of the *word* thanksgiving. Therefore, the opening lines of this psalm express the psalmist's thanks to God and his honor and reverence for God. Perhaps we can understand this better if we think about why we thank and honor our own parents.

Our parents have given us life; they have nourished us. For these reasons, they are worthy of our honor and thanks.

Another thing also "jumps out" at us as we read. Namely, God thinks that we are very special. God cares for us. We are so special that, according to God, we are just a little lower than the heavenly beings. Furthermore, the psalmist tells us that God glorifies and honors *us*. We might expect that a biblical poem would tell us that we should honor and glorify God. But when we read this psalm, we make the astounding discovery that God honors and glorifies **us**.

One more thing also "jumps out" at us as we read. God has made us the caretakers of this world. Clearly, God made everything in the world. All things that exist are gifts from God. And we can enjoy these gifts. Indeed, God wants us to enjoy what he has given us. Each one of us here today has enjoyed God's gifts to us. When you eat a delicious fruit like *nashi*, you are enjoying a gift from God. When you have fun with friends playing volleyball, you are enjoying a gift from God. When you have a stimulating philosophical argument with a friend over coffee, you are enjoying gifts from God. And I sincerely believe that when God sees us *taking pleasure in*

ENGLISH CHAPEL SERVICE

キリスト教学科 David N. Murchie (マーチャー, ディビッド)

SCRIPTURE READING : Psalm 8 (New International Version)

O Lord, our Lord, how majestic is your name in all the earth!

You have set your glory above the heavens.

From the lips of children and infants you have ordained praise
because of your enemies, to silence the foe and the avenger.

When I consider your heavens, the work of your fingers,

the moon and the stars, which you have set in place,

what is man that you are mindful of him, the son of man that you
care for him?

You made him a little lower than the heavenly beings and crowned
him with glory and honor.

You made him ruler over the works of your hands; you put everything
under his feet:

all flocks and herds, and the beasts of the field,

the birds of the air, and the fish of the sea, all that swim the paths
of the seas.

O Lord, our Lord, how majestic is your name in all the earth!

SERMON : “The Caretakers of Creation”

This psalm is a beautiful poem. When we first read it, several things seem to *jump out at us* (immediately catch our attention) as we read. For example, the psalmist clearly believes that the universe

編集後記

大学宗教主任 北 博

昨年の夏は全国的に記録的な暑さで、夏が涼しいと言われる仙台でも暑い日が続きました。更に、冬も暖冬傾向でした。やはり地球温暖化の影響でしょうか。ともあれ、東北学院大学礼拝説教集第十二号が出来上がりました。お忙しい中で執筆してくださった先生方、そして連絡や編集実務に当たってくださった方々、どうもありがとうございます。また、この一年大学の礼拝に直接間接お手伝いいただいたすべての方々に、心からの感謝を申し上げます。

東北学院大学では、土樋キャンパス、泉キャンパス、多賀城キャンパスのそれぞれのチャペルにおいて、学期中は日曜と祝日を除く月曜日から土曜日までの毎朝十時から十時半まで、礼拝が持たれています。加えて、土樋キャンパスでは特に夜間主コースの学生のために水曜日の夜七時十分から四十分まで、また三つの寄宿舎では寮生のために週一回夜の七時半から八時まで、それぞれ礼拝が持たれています。

この説教集に収録されているのは、本学の礼拝の中で実際に語られたものです。東北学院大学では、礼拝を教育の一環として重視しています。この説教集を通して、本学で行われている教育の営みの一端をご理解いただければ幸いです。

地球規模の環境問題のみならず、世界の情勢も日本の将来も先行き不安です。そのせいもあるのでしょうか、ショックキングな凶悪事件が相変わらず後を絶ちません。聖書を読みながら、世のあり方、人のあり方に、思いをめぐらせたい今日この頃です。

「あなたの仰せを味わえば

わたしの口に蜜よりも甘いことでしょう。」（詩編一一九・一〇三）